

幻のワロニー：文学雑誌『ワロニー』における地域主義的企図の生成と展開(1)

著者	鈴木 智之
雑誌名	社会志林
巻	51
号	3
ページ	39-78
発行年	2004-12
URL	http://hdl.handle.net/10114/00015321

幻のワロニー

文学雑誌『ワロニー』における地域主義的企図の生成と展開（１）

鈴木 智 之

序章 課題の設定

以下の論考は、ベルギー・リエージュにおいて刊行された文学雑誌『ワロニー *La Wallonie*』（1886-1892）を対象として、主としてここに見られる「地域主義」的な企図の生成と展開を、一方ではベルギーにおける国民的ないし地域的同一性の構築過程に、他方では文学場 *champ littéraire* におけるこの雑誌の位置の取得過程に関連づけながら記述していくことを目的としている。

1886年、当時まだリエージュ大学の学生であったアルベール・モッケル *Albert Mockel* (1866-1945) とその周囲に集まる若き文学者たちによって創刊された『ワロニー』は、その後、急速にサンボリスムの運動へと接近してゆき、エミール・ヴェラーレン *Emile Verhaeren* (1855-1916)、シャルル・ヴァンレルベルク *Charles Van Lerberghe* (1861-1907)、モーリス・メーテルリンク *Maurice Maeterlinck* (1862-1949)、ルネ・ギル *René Ghil* (1862-1925)、アンリ・ド・レニエ *Henri de Régnier* (1864-1936)、ステファン・マラルメ *Stéphane Mallarmé* (1842-1898)、ポール・ヴェルレーヌ *Paul Verlaine* (1844-1896) など、ベルギーとフランスにおける代表的なサンボリストの寄稿する文学雑誌へと成長していく¹⁾。そして『ワロニー』は、『若きベルギー *La Jeune Belgique*』や『近代芸術 *L'Art moderne*』などととも、19世紀の最後の四半世紀におけるベルギーの文学的「ルネッサンス」あるいはその「黄金時代」の一角を担う重要な媒体となっていく²⁾。

しかし、ここで『ワロニー』に着目するのは、それが「サンボリスト・アヴァンギャルドを代表する器官」(Paque 1989: 88) として格段の成功をおさめたことだけによるものではない。この雑誌は他方にもうひとつの企図を備え、これを刊行当初の時点においては比較的明確な形で打ちだしていた。その企てとは、誌名がすでに示しているように、「ワロニー」という地域 *région* の文学・芸術を打ちたて、擁護しようとするにある。私たちはこれを、この雑誌の「地域主義的企図

projet régionaliste」と呼んでおくことにしたい³⁾。ところが、「地域の文学・芸術」を確立しようとするこの企ては、雑誌の成長と文学場における地位の確立とともにしだいに変質・後退し、最終的には二次的な位置へと押しやられていく。

しかし、その過程において、彼らがいかなる形で地域的同一性を構想し、それはどのような文学的形象に結びついていたのか。彼らの文学実践はいかなる社会的規定力に方向づけられ、また社会的な言説空間に何をもたらすことができたのか。その地域主義的な企図の展開は、「サンボリズム」という美学的な自己規定の明確化とどのような関連をもっていたのか。さらには、地域主義的な企図の形成と展開、あるいは後退のプロセスをどのような形で説明することができるのか。ここに、検討されるべき一連の問題を見いだすことができるように思われるのである。

1 歴史的状況と分析の焦点

こうした記述・分析課題の設定は、たがいに切り離すことのできない二つの社会的関心に結びついている。

ひとつは、国民的ないし地域的同一性の歴史的構築過程において文学言説がどのような位置を占め、社会—文化的な境界設定のゲームにいかなる関与を示すのか、という問題。そしてもうひとつは、ひとつの文学圏（あるいは文学場）の境界において制度的な周辺性を条件づけられた文学実践が、いかなる戦略的展開の中で自己の正統性の獲得をはかっていくことができるのか、という問題である。この二重の問いを検討していく上で、『ワロニー』はひとつの興味深い事例を提供してくれる。それは、この雑誌がまさに、国家と地域の境界線、言語の境界線、そして文学の境界線の折り重なる地点に誕生し、それぞれの領域を主張しあう力の交錯の中に、みずからの位置を定めようとしているからである。

そこでまずは、雑誌『ワロニー』をとりまく歴史・社会的な状況を簡潔に整理し、その文脈の中で課題設定の意義を確認しておくことにしよう。

(1) 新たな地域的枠組みとしての「ワロニー」

今日、「ワロニー Wallonie」ないし「ワロン地方 région wallonne」という言葉は、ベルギーの言語境界線以南の地域、すなわちブリュッセルをのぞくフランス語使用地域を指すものとして理解されている。そして、この「地域 région」という単位は、1980年の憲法改正以降、行政的な意思決定の主体として制度的な土台を

与えられてもいる。しかし、「ワロン地方」が、社会・文化的な統一性をもつ「ひとつの地域」であるということは、歴史的に見て決して自明の事柄ではない。「ワロン」という集合体の存在は、ベルギー国家の成立以降、政治的な条件の変遷の中で要請され、漸進的に形作られてきたものであるが、今なおむしろ、「同一性の不在」こそが所与の事実であるかのように語られることが多い。ワロン地域の集団としての同一性——その同一性を正統なものとして語る条件——は、ベルギー・ネーションのそれと同様きわめて脆いものであるといわざるをえない。

ベルギー国家は、ワテルローにおけるナポレオン敗北後のウィーン会議（1815年）によって領土を定められたオランダ王国のおよそ南半分の地域が、1830年にオレンジ公ギヨーム1世に反旗を翻し、独立闘争を企てたところから成立したものであった。しかしそれ以前の時代に、（現在ベルギーと呼ばれている）この地域の人々が独立の政治的な統一体を構成したことがあったわけではない。そこには中世期以来常に小さな公国が乱立し、列強の介入の中でしばしばその支配下に置かれてきた。15世紀にはブルゴーニュ公国が、16世紀にはカルル5世、さらにはフェリッペ2世の権勢が広くこの地域を傘下に組み入れる。しかし、それは地域毎・都市毎の自律的な政治システムを解体するにはいたらなかったし、より大きな政治体制への共有された帰属意識を生みだすものではなかった（Hayt & Galloy 1994）。その中にあって、リエージュ公国 principauté de Liège は、972年にノッジェ Notger が司教公 prince-évêque の地位について以来、約9世紀にわたって、実質的に独立した地位を保ちつづけることになる（Demoulin & Kupper 2002）。

このベルギーの地に政治体制としての同質性と領土としての統一性がもたらされるのは、ようやく18世紀末のことである。ルネ・アンドリアンによれば、「統一されたベルギーに領土としての、また行政上の統一性の土台を与えたのは、革命政府のフランスであった」（Andrianne, 1983: 16）。オーストリアに勝利したフランスは、1795年、リエージュ公国を含む現在のベルギー地域をフランス国の領土に併合する。これによって、既存の政治的な境界が撤廃され、県 départements, 地区 districts, 群 arrondissements, 市町 municipalités からなるフランス的な行政区分が導入される。中世的ギルドは解体され、封建制度上の諸権利は破棄され、単一の法に基づく支配が都市、農村を問わず課せられていくことになる。この「フランス支配」の効果によってはじめて、ベルギーは政治的な統一体としての枠組みをもつことになるのである。

アンドリアンの理解にしたがって、「ベルギー」の統一性の基盤がフランス支配時代に生まれたものであるとするならば、1830年に「ベルギー人たち」が独立を要求した時、その土台はせいぜい30年ほどの歴史しか有していなかったことになる。もちろん、オレンジ公ギヨーム1世に対して、南部地域（現ベルギー）の人々が団結して抵抗するいくつかの理由が存在した。北部（現オランダ）がカルヴァン派の支配力の強い地域であったのに対し、南ではカトリックが優位であったこと。関連して、学校教育を国家統一の基盤にすえようとしたギヨーム1世に、ベルギーのカトリック勢力が強く反発したこと。オランダ語を唯一の公用語とする政策に、フランス語使用者であったベルギーのブルジョアジーたちが反発したこと、など（Beaufays 1988）。しかし、共有された過去の不在という意味において、ベルギー国という統一体の出現に強固な歴史的土台が欠けていたことにはかわりはない。したがって独立国ベルギーは、「突然に＝思いがけず *par surprise*」誕生する（Beaufays 1988:15）。この国家は、いくつかの政治・経済的な要因が、局面状況の中で生み落とした偶発的産物であり、これをひとつの国民（ネーション）として語るための諸条件が、きわめて乏しい形でしか与えられていなかったのである。

ベルギーの詩人であり、文学史の研究者でもあるマルク・クワッフブールは、この脆弱な言説化の条件を「歴史の欠落 *déshistoire*」という言葉で表現している。そこに意味されているのは、ベルギー・ネーションの集団的同一性の不在であり、同時に、共有の歴史 *l'Histoire* を確かな現実として語るための諸前提の欠如である。彼は次のように述べる。

その期間の短さにおいても、国を独立へと導くことの相対的な容易さにおいても、実際のところ、1830年の蜂起は、国民の解放のための長きにわたる闘争と直接に比較することのできるものではない。そうした闘争こそが、とりわけ集合的記憶の地平に流血の上に打ちたてられた英雄的な物語を与えることによって、人間集団の凝集性を生み出すのである。他方、この150年間の国家の歴史は、ひとつのネーションに形を与え、奇妙な形でこれを自明なものとすることができるような深い枠組みを形作るには、あまりにも不十分な歴史的時間しか構成していない。（Quaghebeur 1980:15）

かくしてクワッフブールによれば、ベルギーには共有された過去の栄光も、独立のための長い闘争の歴史も、そのために命を落とした戦士たちの記憶も存在しない。その独立後の歴史の中でも、「英雄的な物語」を国民に共有の財産として生み出す

ようなエピソードには恵まれていない。ネーションというものが多かれ少なかれ神話的な構築物（想像の共同体）に他ならないとしても、ベルギーにはその神話の枠組みや内容となる歴史・文化的な資源があまりにも不足していた。アンドリアンの言葉を借りれば、ベルギーは「ネーションなき国家 un État sans nation,あるいは誤解の上に形作られた擬似ネーション pseudo-nation」(Andrianne 1983: 23)なのである。

しかし、この「ネーションなき国家」においても、ひとたび政治的な主権が確立されれば、そこには「国民の創出」が要求される。独立後の1830年代には、早くも「国民の統一性の象徴」として「ベルギー文学の創出」が課題として語られる(Klinkenberg 1980)。この世紀の終盤には、H. ピレンヌやG. クルトといった碩学の歴史家たちが、中世期から連綿とつづく「ベルギー人」の歴史、あるいは「ベルギー文明」の歴史を構想する。そして、弁護士であり作家でもあったE. ピカールが「ベルギーの魂 l'âme belge」の存在を熱く主張する(Hasquin, 1996)。そうした同一性構築のための言説が、貧弱な前提条件に抗して、いかに「ベルギー国民」の存在を語ることができたのか。これは、本稿の主題にもつながる、ひとつの興味深い検討課題であろう⁴⁾。

同一性の基盤の脆弱さにかんしていえば、「ワロニー」という地域についても、「ベルギー」と同様の、あるいはそれ以上の不確定性を見ることができる。

わずか17,000平方キロメートルの広さしかもたないこの「地域」が不可分の集合体を形成するという意識は、上述のような歴史的・政治的な条件の下で、少なくともベルギー国家の成立以前には存在しなかった、ということができる。もちろん、その土台となる文化的な共通性がまったく見られなかったわけではない。ローマ帝国の北辺に位置するこの地域では、ラテン語から派生した口語言語 *parlers* が話され、したがってまたフランス語を受け入れる素地も整っていた。言語学的な研究によれば、すでに中世以来、この地域では共通言語 *langue véhiculaire* としてのフランス語と各地方の言語との共存が始まっていた(Chaurand 1999: 512)。しかし、こうした言語的な状況は、ゆるやかな意味での「ラテン文化 *latinité*」の共有と、フランス(語)文化への親近性をもたらしていたものの、決して「ワロンとしての同一性」の感覚を醸成するものではなかった。話されていた土地の言葉も、リエージュやナミュールではオイル語系のワロン語であったのに対し、トゥルネーを中心とした地域ではピカール語系の方言であり、そこに強固な言語的共同性が存在したわ

けではない⁵⁾。むしろ、小さな自律的単位に分割されてきた歴史的な経緯は、各地域の独自性と閉鎖性を高める効果を生みだしてきた。再びルネ・アンドリアンによれば、「列強の欲望の対象であったこの土地は、司教領、伯爵領、公爵領に分割され、共通感情どころか、大きな政治的集合体への帰属感情さえも育むことができなかった。個別主義が加速し、閉鎖的愛郷心 *l'esprit de clocher* が根をおろしていた」のである (Andrianne 1983:32)。

ワロン同一性の歴史的な不在（または脆弱さ）は、共通名称の欠落という事実からも推し測ることができる。アルベール・アンリの研究によれば、「ワロニー」という言葉が、ベルギー国内のロマンス語系諸語の話される地域という意味で用いられた最初の例は 1844 年の文献に見いだされる。それ以前に確認される範囲では、1388 年の文献に「ワロニー」という言葉が孤立的に用いられているものの、それは現在のワロン地方とは異なり、言語境界線に隣接する地方を指すものであった⁶⁾。したがって、「ワロニー」という地域の総称は、ベルギー国家の成立後、その国境線が確立されたあとに生まれたものである。しかも、19 世紀の後半にいたるまでは、「ワロニー」は、文献学者や歴史学者のあいだにのみ流通する専門用語にすぎなかった (Henry 1990)。

この「ワロニー」という新造語が人口に膾炙する大きなきっかけとなったのは、私たちがここでとりあげようとしている『ワロニー』に他ならない。新しい雑誌のタイトルを探している時に、雑誌の主導者アルベール・モッケルは、手元にあった小さな冊子 (J. Stecher, *Flamands et Wallons*) の中にこの言葉を見だし、拾いあげる。それは、まだ人々に広く受けいれられていない新しい「地域」のイメージを喚起する言葉であった (Charlier: 13)。ここからも推察されるように、『ワロニー』という雑誌に集った若き文学者たちにとって、その名によって示される集合体や、そこに共通する文化や芸術は、自明のものとして存在するものではなかったのである。

(2) 1880 年代：政治・経済的状况

では、『ワロニー』という新たな地域名称を冠した文学雑誌は、どのような局面状況の中で誕生したのであろうか。ここでは、この雑誌が誕生した 1880 年代の政治・経済的な状況を確認しておくことにしよう。

① 経済状況の変動と労働問題の顕在化

1880年代。それは、ベルギー社会が政治・経済的な次元でひとつの重要な歴史の変節を経験した時期であった。まず、政治的なシステムにおいては、1840年代の後半からつづいた「カトリック勢力」と「自由主義勢力」との二極構造が終焉し、これに「労働者階級」の代表となる「社会主義勢力」が参入して、その後の一世紀を支える三極構造が形成されていく。

サヴィエ・マビュの『ベルギーの政治史』にしたがえば、なかでも1884年から86年までの3年間は、ベルギー社会に潜在した社会的な断絶が一挙に顕在化し、構造的な変動が劇的な形で進行した期間である。その背景には、第二次産業革命の影響による経済システムの構造的な変動と、景気の循環的な変動がもたらした長期的な不況（1873-1895年）の影響がある。1880年ごろ、ベルギーにおいてはじめて、産業に従事する人口が農業に従事する人口を上回るようになる。この時期はまた、技術革新が産業システムの中に導入され、電力の使用が増大すると同時に、テレコミュニケーション技術が発達する時代でもある。産業システムの技術的な転換は、労働者の給与を引き下げ、雇用を不安定なものとし、失業者を増大させる。他方、数においてはすでに多数派として存在し始めた労働者の中に、大きな発行部数を誇る大衆的な媒体が生まれ、階級意識の形成の土壌が整えられていく（Mabille 2000: 168-169, 175-176）。

こうした状況の中、1885年4月、全地域の労働者階級を代表する政党、ベルギー労働党 Parti ouvrier belge (POB) が結成され、以後、自由主義、カトリックにつづく第三の勢力として国会にもその代表者を送りだしていくようになる。その一方で、1886年3月、リエージュとエノー諸地域において、大規模のストライキが決行され、結果的には暴力的手段によって抑圧されるにいたる。リエージュでも、サン＝ランベール広場に2～3,000人が集結し、治安維持軍が介入し、逮捕者47人、死者1人を数える（Mabille 2000: 179）。しかし、大規模に組織された運動を通じて顕在化した「社会問題」は、以後回避することのできない政治的な議題となり、労働者階級は政治の表舞台へと躍りでていくことになる。その中で、普通選挙制度の実現にむけた動きが加速していき、1893年、この点にかんして憲法の最初の見直しが行われるにいたるのである。

階級問題あるいは労働問題という形をとって浮上する政治的な現実に対して、『ワロニー』に結集した若き学生たちがどのような意識をもち、いかなる態度でこれに向き合おうとしていたのか。そしてその態度が、彼らの文学的な実践とどのよ

うに結びついているのか。この古典的な問いは、やはり放棄されることなく検討されつづけなければならない。この時私たちは、階級社会の形成と労働問題の顕在化が、一方において「社会文学」を生みだしながら、同時に他方では、社会・政治的な現実から切り離された「純粋な芸術・文学」という理念をもたらすものであったことに留意しておく必要があるだろう。ゾラに代表される「参加する知識人（文学者）」の形象が生みだされると同時に、文学や芸術は「自律的」な領域として制度化されていく。J. デュボアや M. ビロンが強調するように、この二律背反的な「意味請求」のせめぎあいの中で、近代（モダン）の文学・芸術の運動は把握されざるをえない（Dubois 1985. Biron 1994）。『ワロニー』（その担い手の大半は、ブルジョアジーの子弟たちであった）にかんしても、社会問題が目に見える形で浮上する状況であればこそ、ある種の危機意識と表裏一体の関係をなしながら「文学」なるものの「自律性」が真摯に追求されていく側面がある。しかし、歴史的現実コミットしようとする姿勢と、純粋な文学性を追い求めようとする姿勢とのあいだにはやはり並びがたい要素があり、個々の主体はいずれかの側に傾斜しながら、みずからの位置を定めていかざるをえない。そして、この雑誌を担った文学者たちについてみれば、「社会問題」への対応の仕方と、文学の地域的な帰属の選択、あるいは「地域の文学」の構想の仕方とのあいだに一定の相関が存在するように思われる。この点については、のちに A. モッケルと C. ダンブロン Célestin Demblon (1859-1924) の比較対照の中であらためて論ずることにしよう。

② 言語問題の浮上

さて、この時代のベルギーにおいて社会構造の決定的な変容をうながした要素は、経済システムの変動がもたらした階級的な要因に限定されない。他方で、これに交差するもうひとつの重要なモメントとして、「フラマン運動 le mouvement flamand」⁷⁾の台頭とこれにともなう「言語問題」の顕在化を挙げておかねばならない。

1830 年、独立を宣言したばかりのベルギー政府は、「言語使用の自由」を原則として認めながらも、「公用語」としては、フランス語に独占的な地位を認める法令を発する。支配階級であったブルジョアジーの共通言語が、そのまま行政と司法の言語として支配的な位置を与えられ、他方、使用者の人口においては多数派を占めていたフラマン語は、地域毎の多様性が大きすぎて共通言語としての用をなさないという理由から周辺的な位置に置かれることになるのである。これに対して、文献

学者や作家たちによるフラマン語文化擁護の運動は、非常に早い時点から展開されていく⁸⁾。例えば、しばしばベルギーにおけるフラマン語文学の出発点に置かれるヘンドリック・コンシアンス Hendrik Conscience (1812-1883) の『フランドレンの獅子 De Leeuw van Vlaanderen』は 1838 年に刊行されている。また 1840 年には F. A. スネレルト, J. デレート, J. F. ウィレム, J. B. ダヴィッドの主導による「請願書」が提出される。(そこには、①フランドル諸州における自治体および州の問題はフラマン語で処理されること、②これらの諸州における官吏はフラマン語を理解し、これを行政業務において用いること、③当事者の言語に応じて裁判においてフラマン語が使用されること、④フラマン語アカデミーの創設、⑤ゲント大学およびその他の国立の教育機関においてフラマン語がフランス語と同等に扱われることが、要求されていた)。そして、1847 年 11 月には、H. コンシアンスと F. A. スネレルトの手によって、「フラマン運動宣言」が発せられる。「(「フラマン運動。低地ドイツの人民の権利の擁護者によってその同胞に提示される基本原則の宣言」と題されたこの文書では、①高等・中等教育機関におけるオランダ語教育、②フランドル地方の行政機関におけるオランダ語の使用、③その実現にむけた国家による刊行・出版の遂行、④フランドルの民衆を啓蒙する刊行・出版への政府による援助、⑤フラマン語による作家への助成、⑥フラマン語演劇への助成、⑦法廷でのフラマン語の使用、⑧フランドル諸州および諸市の行政および公共領域におけるフラマン語の使用、⑨政府刊行文書における二言語の使用、⑩すべての官吏および軍隊の指揮官に対するフラマン語使用能力の義務化、などが課題として提示されていた) (Mabille 2000)」。

公共領域においてフランス語との対等の地位を求めたこれらの「請願」ないし「宣言」は、二言語間の不平等を社会的な問題として提起し、周知のように、それはその後のベルギーの政治を方向づける主要な要因となっていく。しかし、1860 年代にいたるまで、運動はごく周辺的なものにとどまり、大衆的な広がりをもたうるものではなかった。少なくとも、その成果が言語法の制定という形で実現していくのは 1870 年代以降のことである。1873 年、最初の言語法は、法廷における両言語の使用を可能にし、1878 年には、行政領域での両言語の使用が認められ、1883 年には、教育における二言語の使用が定められる。独立後 50 年を経て、ようやく言語問題は、政治の議題の中心的位置へと押しあげられていくのである。

他方、ワロン諸地域においては、この「フラマン運動」の台頭に対するリアクションとして、みずからの利益と文化的独自性を擁護する運動が生起していく。これ

が一般的に「ワロン運動 le mouvement wallon」と呼ばれるものである。通常、その歴史的な出発点は、1890年に開催された第一回の「ワロン会議 le congrès wallon」に求められる (Dupuis & Humblet 1998)。

しかし、この政治的な行動としての「ワロン運動」の成立に先立って、方言 les dialectes としてのワロン諸語 les wallons の価値を保存し、その意義を再確認しようとする文化的な運動が諸地域においてすでに展開されていた。中でもリエージュにおいては、1856年、「ワロン語文学リエージュ協会 la Société Liégeoise de Littérature Wallonne」が結成され、運動の中心的な機関をなすとともに、その他の諸州における組織化の雛形を提示することになる (Mahim 1999)。社会学者ドゥニーズ・ヴァンダムによれば、この初期の活動は「決してフランス語の地位を問題視するものでも」、「ベルギー国家の統一性を問題とするものでもな」く、「一種の二言語使用 diglossie を促進しようとする」ものであった (Van Dame 1998; 75)。しかし、フラマン運動が少しずつその成果をあげるにしたがって、言語共同体間の関係に対する意識が深まり、19世紀の終わりにむけては、言語法の進展にともなってベルギー国家がフラマン化 flamandisé されていくことを告発する主張を掲げるようになる。したがって、ここにはすでに、「ワロン運動」の先行的な形態を見いだすことができる。ヴァンダムによれば、「このワロン運動の第一の段階は、文学的かつ反フラマン的 littéraire et anti-flamand なものとして記述することができる」 (ibid.: 76)。

これに対し、1890年代以降の「政治的な」ワロン運動——これをヴァンダムの時期区分にしたがって運動の第二段階と呼ぼう⁹⁾——は、普通選挙法の実現によって、しだいに発言力を増していくフラマンに対抗して、国家の連邦化を訴える主張へと展開し、その意思はジュール・デストレ Jules Destrée (1863-1936) による「ワロニーとフランドルの分離にかんする国王への手紙」(1912年)によって典型的に表現されることになる¹⁰⁾。

私たちが論じようとしている『ワロニー』は、「ワロン語文学」とははっきりと一線を画したところで刊行されているし、言語問題にかんしても狭義の政治的な主張を直接に語ろうとするものではない。しかし、『ワロニー』の創刊メンバーの周辺には、アンリ・シモン Henri Simon (1856-1939) をはじめとしてワロン語文学にかかわる友人たちがあり、雑誌の寄稿者たちの多くは、その方言文学の運動に相当の関心をもって接していた (のちに見るように、雑誌の「時評」においては、しばしば「ワロン語文学・演劇」に対する言及がなされている)。他方で、彼らの中

からは、アルベール・モッケル、エクトール・シェネー Hector Chainaye (1865-1915)、シャルル・デルシュヴァルリ Charles Delchevalerie (1872-1950) をはじめとして、のちの「ワロン運動」に深くかかわる主体が生まれている。したがって『ワロニー』は、その刊行の時期においても、社会的な関係の網の目の中でも、ワロン運動が第一段階から第二段階に移行していく、その結節点に位置している。したがって、彼らの文学的な立場がフラマン運動やワロン運動に対していかなる関係をもつのかという問題は、言語の地位をめぐる歴史的な係争とこれに対する「文学」のかかわりを考える上でもひとつの意義を有するはずである。

③ 地域的同一性の構築と文学の企図

前節の記述からも推察しうるように、「ワロン同一性」の構築という新しい課題は、ベルギー国家成立後の政治的局面状況と、民族と言語の結びつきをめぐる新しいまなざしとの接合の上に形作られてきたものである。ベルギーの独立によって他国とのあいだに政治的境界線（国境）が引かれ、その中で国土の中心を東西に走る言語境界線の存在が意識されるようになれば、そこにはおのずから地理的に明確な輪郭をもった「地域」の像が構成される。そしてこの「地域」は、単なる地理的なカテゴリーにとどまらず、社会・文化的な共通性を備えた人の集まりとして、すなわち「民族 *peuple*」や「人種 *race*」として語られ、その時代の言説の網の目の中にとらわれていく。ここに地域的かつ民族的な集合体としての「ワロン」という主題が浮かびあがってくるのである。

この主題は、言語境界線の北側からフラマンの民族的同一性とフラマン語使用の正統性を主張する声が高まっていくにしたがって、否応なくその重要性を増していくことになる。上述のように、ベルギー国民の民族的単一性を語る歴史のおよび文学的言説が最も明確な表現を獲得するのは、19世紀の終盤から20世紀の初頭にかけてのことであったが、これと並行して、二つの民族（ワロンとフラマン）の個性、独立性を強調する言説が対抗的に構成され、しだいにその力をえるようになる。そして、20世紀の歴史をふりかえれば、「二つの異なる民族からなるベルギー」という構図が、認識の枠組みとしてしだいに支配的なものとなっていくのである。

私たちが問題にしなければならない時代、すなわち1880年代から90年代のベルギーは、この「二元的な民族対立の構図」がしだいに輪郭を明らかにしていく、その醸成期間であった。フラマン運動が無視しがたい勢力を形作り始めた1870年代の中葉以降、これに応じて、国土の南半分に住む人々の中でも、「我々＝ワロン」

とは誰かという問いが意味をもち始める。「フラマン」という他者の台頭によって、「ワロン」というアイデンティティが構成されるべき課題として浮上してくるのである。

しかし、この問いを起点として次第に組織されていく「ワロン運動」は、北側からの動きが言語的共同性を基盤とした「民族の同一性」とその「正統性の認知」を追求する運動であったのに対し、純粹に「ワロン民族運動」とは呼びがたいような曖昧な性格を備えていた。というのも、次のようないくつかの点において、ワロン運動は両義的な性格をもっていたからである。まず第一に、少なくともその当初においては、ワロン運動は、統一国家ベルギーの擁護という動機づけと、ワロンという地域の利害の擁護という地域中心の発想とを同時に備えていたこと。関連して、第二に、言語・文化的には、フランコフォンの優位の確保という課題と、ワロン語（地域方言）文化の再発見・保護という課題とを同時に掲げていたこと。そして第三には、地域の民衆 *peuple* の一体性を語りながら、ベルギー経済を主導したワロン・ブルジョアジーの支配の正統化という階級的な性格をもちあわせていたこと。こうした、多面的で矛盾をはらんだ「要求」は、当然「ワロンの文化」を語る言説のありようにも少なからぬ影響をおよぼすことになる。

いずれにせよ、『ワロニー』に集った若者たちが「自分たちの＝地域の」文学・芸術を構築しようと志した時、その動機づけの背後に、上述のような歴史的状況とイデオロギー的な要求があったことは想像に難くない。ワロニーに固有の芸術・文化を創出しようとする、この雑誌の「地域主義的」な側面は、歴史的・政治的に形作られた問い（「ワロンとは誰か」）へのひとつの応答であったと考えることができる。その点において、ひとつの文学雑誌が提示した言表を、歴史的・政治的な要請に応える「社会言説」の一形態として読むことができるはずである。

2 文学場の境界

このように、文学の言語もまたひとつの社会言説を形作る。文学テキストもまた、政治・社会的な要請に呼応する形で形作られ、その時代の言説の網の目、言説構成の体制の中ではじめて意味作用をおよぼしうるのであると考えることができる。しかしながら、少なくとも近代の「文学」は、単純な社会言説の一形態として、その他の諸言語（政治や社会評論の言語）と同一の平面に流通するわけではない。J. ハバーマスが論じたように、近代の科学や芸術は日常生活の場とこれを規定する諸言語

の空間から自律し、固有の言説空間を構成する。「文学」もまた、その他の言説領域のそれには還元しえない、独自の実践の論理を備えた「場」として編成される。この「文学場」の固有の論理を見ることなく、「文学言説」を「政治・経済的な状況」に関連づけることはできない。

したがってここで、「文学」という言語的生産の空間を、それ自体において対象化する社会学的分析視角の導入が要求される。そうした分析の土台は、P. ブルデューや J. デュボアによってすでに提示されている。

(1) 「場」あるいは「制度」としての「文学」

周知のように P. ブルデューは、1960 年代末から書きつがれてきた諸論考 (Bourdieu 1968, 1971, 1972, 1992) の中で、「芸術」や「文学」を一種の集合的信憑——イリュージョン——に支えられた社会的構築物としてとらえ、これを生産し消費する諸実践が展開される社会的空間——芸術場・文学場——を対象化する道を切り開いてきた。ブルデューによれば、芸術作品や文学作品がその他の社会的有用性に還元されえない本質的な価値として知覚され、その「象徴的財」の交換と価格決定がなされていく特異な「市場」が形成されるのは、(フランスでは) 19 世紀中葉の出来事である。これ以降、芸術・文学に固有の価値を定義し、これを配分する権限を負った諸審級が配備され、それぞれの主体は、外在的な社会的文脈から相対的に切り離された空間において、その芸術・文学的正統性の承認を賭けた競合の過程に参入していくことになる。その空間の内部、とりわけブルデューが「限定的生産の領域」と呼んだ「教養階級むけの生産の場」においては、社会的諸要求に対する自律性が、その生産物の芸術的・文学的価値を押しあげる重要な要件となる。『芸術の規則』(1992) をはじめとするブルデューの論考は、この「無償的」で「純粹」な「芸術的創造の行為」が、正統性の承認を「賭け金」とした「場」の「経済的構造」によっていかに規定され、かつその実践が、「自律性」の信憑を強化しつつ、いかに「場」の構造を再生産していくのかを示してきた。

他方、このブルデューの着想に強く影響を受けながらも、むしろ「制度」という概念に力点をおいて、同様の理論構成を試みてきたのが、ベルギーの文学理論家ジャック・デュボアである。デュボアもまた、「文学制度」という言葉によって、文学実践とは、どこにもその場所を特定されない「中空」においてなされるものではなく、具体的な社会組織(例えば、出版や批評や学校や家族や国家)との関連の中で、社会構造の中に位置を占めているという事実を指し示そうとする。「文学制度

論」は、普遍的な本質が主張され、日常の社会的な現実を超越したものとみなされるような特異な実践が、19世紀を通じて歴史的に構成されていく過程をあとづけ、その制度的機構がいかに機能するのかを問うていくのである (Dubois 1985)。

「還元不能」な「自律的」存在としての「芸術」ないし「文学」の、社会的生産と再生産を主題化していくという点において、デュボアとブルデューの視点は近似的なものであり、その理論構成は連続的な平面の上にある (したがって、私たちは二人の立場を峻別することなく「場の理論」や「制度論」という言葉を互換的に使うことができるだろう)。しかし、ここで両者の置く力点の違いをあえて強調してみるとすれば、ブルデューにおいては「文学場」の内在的な一貫性と自律性が強調されがちであるのに対し、デュボアは制度に内在的な矛盾や緊張、そしてその外在的な規定性を重視する傾向にある、ということができる。もちろん、いずれの場合にも、「文学」の独立性は相対的なものであり、常に「規定された自律性 *autonomie déterminée*」として性格づけられるものである (例えば、ブルデューにおいても、作家のたどる軌道はその主体が相続した社会的・文化的資本の多寡によって強く規定される)。しかし、ブルデューが「場」の構造と機能を方向づける外在的諸要因について多くを語らないのに比較して、デュボアの場合には、「制度」がおよぼす作用や、その形成をうながす社会・歴史的な文脈への言及が積極的な形でなされる。デュボアにとって、「文学制度」は、アルチュセールの概念に近接する「イデオロギー装置」のひとつであり、分析の照準はまず何よりも「制度的媒介」、すなわち歴史・社会的な諸条件が場の構造によって媒介されながらいかに文学生産を規定しているのかに置かれる。また、これと関連して、「再生産」メカニズムの析出を重視するブルデューが、場の閉じた構造、これを支配する「法」の強固な働きを主題化する傾向にあるのに対して、デュボアは、場の中を横断するさまざまな力が、文学制度に固有の論理によって「屈折」を経験しながらも、そこに緊張と矛盾を呼び起こしていくところに照準を合わせていく。こうした相対的な差異は、彼らの理論を継承し、新たな対象に適用していこうとする際の、選択的な修正の幅を指し示しているように思われる。

いずれにせよ、固有の論理にしたがって文学実践を方向づける自律的な社会空間の存在を明確化した彼らの議論は、文学テキストと社会的コンテクストとを直接的につきあわせ、後者から前者への規定関係や、それに対する前者の応答を論じてきたかつての「文学社会学」に大きな視角の転換を迫るものであった。私たちが本稿において主題化する「文学雑誌」の分析においても、制度論的視点の重要性は否定

しがたい。後述のように、「雑誌」が文学場において果たす機能は多面的であるが、例えば『ワロニー』のように、若き作家たちが自発的に編集・刊行していた媒体においては、「台頭」のための「戦略拠点」という性格が強く押しだされてくる。そこに提示されるテキストは、作品であれ、批評的な言説であれ、その時点での「場の構造」とこれに応じた「可能性の空間」（少なくとも、彼らの目から見た可能性の配分状況）に規定され、これに対する戦略的な応答として形作られるのだと考えることができる。

（２） 場の境界

しかし、ベルギー・リエージュにおいて刊行された雑誌『ワロニー』を検討の対象にすえようとする時、私たちはこれをいかなる「場」に結びつけて考えることができるのだろうか。この点に関連して、場の理論に付随するひとつの理論的問題について触れておくことにしよう。それは、文学場の境界を政治的な領土の境界との関連においてどのようにとらえることができるのか、という問題である。

ブルデューの『芸術の規則』も、デュボアの『文学制度』（1985）も、主としてフランスの文学状況を対象として書かれた著作であった。自律的文学生産の場とその再生産原理にかんして彼らの提示した概念は、まず何よりもフランス文学の近代的特性——モデルニテ——の分析装置である。では、その「枠組み」をベルギーの（あるいは「ワロニー」という地方の）文学生産にどのような形で適応させることができるだろうか。

それぞれの国や地域にはそれぞれの文学圏があり固有の場が形成される、ということであれば、研究は並列的な比較の手続きへと向かうことができる。しかし、ベルギーをはじめとするフランス語使用の周辺の諸国・諸地域においては、それぞれの「国」または「地域」の文学が、「フランス文学」に対して独立的なものとして存在しうるかどうか、常に大きな問題として浮上してくる。マルク・クワッフブルがいうように、「その存在が自明のものではない」ところに「ベルギー文学」の宿命的な条件がある（Quaghebeur 1982）。「文学」というものの存在が「場」の存立に依存したものであるとすれば、その「境界」がいかなる形で引かれているのかが同時に問われなければならない。

P. ブルデューは、「ベルギー文学は存在するか？」と題された小文において、この問題に直接的な検討を加えている。そして、問いに対するブルデューの答えは明

確である。「ベルギーの作家たちが、編集・出版社、雑誌、劇場といった一群の固有の制度を備えているとしても、彼らは固有の聖別化の審級を所有しない」。したがって、彼によれば、「ベルギー文学の場は存在しない」のである。確かに、ド・コステルやルモニエ以来、ベルギーに特徴的な文学を産出しようとする努力が積み重ねられてきた。しかし、その試みはいつも、パリの文学的審級によって承認される限りにおいて正統なものとみなされてきた。この恒常的な依存関係において、ベルギーには自律的な文学場は成立していない、とブルデューは主張する。ベルギーの文学は、「[フランス国内の]^{フログアンス}諸地方の文学と同じように、フランスの文学場の法に従属しつづける」のである (Bourdieu 1985)。

この指摘は、ベルギーの作家たちが常に自覚し、これと闘ってきた構造的な問題にかかわっており、ブルデューの導いた結論はある程度まで妥当なものである。しかし、「ベルギー文学（の場）は存在しない」という断定は、微妙な問題をいささか単純に処理しすぎているように思われる。例えば、ベルギーのフランス語文学の内部には、独自の正統化の審級（例えば「文学賞」や「アカデミー」）が存在するし、国内の出版社からのみ作品を刊行し、相応の評価を獲得する作家も一定の割合で存在している。したがって、ベルギーの文学制度が完全に自律的な形では機能しないとしても、文学場はいわば「弱い形で」成立しているし、これをとりまく社会的環境も当然のことながらフランスのそれとは異質なものである。そしてなによりも、「ベルギーに固有の文学」は存在しうるのかという問いが、国民的な同一性の問題と絡みながら個々の実践主体のレベルで実質的な意味をもちつづけている。ここでは、文学実践の主体は、常に何らかの二重の帰属意識をもち、状況毎、個人毎に異なる形で、「フランス文学」への帰属を強く主張したり、「ベルギー文学」としての固有性を押しだしたりする。この「自律と従属」のたえざるせめぎあい、構造的な二重帰属がもたらす不確定性が、ベルギーの作家たちに固有の条件を与えている。つまり、「ベルギーの文学」は「パリの制度的審級」に従属するとしても、「フランス文学の場」の中に完全に包摂されるわけでも、境目なくそこに接続するわけでもない。いいかえればそこには、常に「境界設定」という課題が課せられている。その様相は、「^{フログアンス}地方」の作家たちのそれと完全に同一なわけではない。

他方、J. デュボアは、『文学制度』の中で、フランス国外のフランス語文学を、パリの制度機構に対する周辺性——従属性と距離——によって特徴づけ、これを「マイノリティ文学」の一端に置いて論じている。その論理は、フランスの文学場

に対する構造的な従属性を基調とする点において、ブルデューのそれと方向を一にしているといえるだろう。例えばデュボアは、次のように論じる。

地域文学が広く認められ、支配的文学の一端を担うということが起こりうるとすれば、それは特殊な、一時的なダイナミズムによって、その文学にともなう地域的（ないし国民的）イメージがある種の状況にとって好都合な美的価値へと転換される時においてである。それは、ベルギーの一群の作家たち（モッケル、ヴェラーレン、ローデンバッハ、メーテルリンクなど）がパリの場に対して半ば外在的で半ば内在的な位置を占めながら、サンボリスムの舞台において恵まれた役どころを演じた時に起こったことであった。（Dubois 1985 : 135）

このように、地域の文学が独特の個性を示すことがあっても、中央の審級の承認を待たなければこれを「象徴資本」へと転化することはできないのであり、19世紀末のベルギーのサンボリストたちが「創造的」な生産をもたらしたのも、その「周辺の」な性格がパリの人々の目に「美的」なものと映るという好都合な条件に支えられていたからに他ならなかったのである。その意味では、J. デュボアの視点からも、（ベルギーのフランス語文学を含む）「地域的」な生産は、それが「地域的」なものとしてあるかぎり「原則としてマイノリティ的なもの」であらざるをえない。

しかし、他方でデュボアは、パリの審級への「追随」を余儀なくされるフランス国内の地域的な文学生産との対比において、「フランス語が話されるその他の国では、文学生産の自律的地位があるいは問題視されるとしても、しかしそれは単純に中央の制度に吸収されてしまうわけではない」と語り、ここでは特に「ケベック文学」をとりあげて、「パリの一極集中的な構造に問いを投げかけ」、「マイノリティ性」を「力動的な関係」へと転換する可能性が存在することを示唆している。ただし、場の「中心—周辺」の構造、あるいは場の「境界設定」にまつわるせめぎあいの中で、いかなる文学空間が構成されていくのかについて、この著作はまだ十分に論を尽くしているわけではない。

こうした課題を引き受けながら、新たな議論を展開しているのは、ブルデューやデュボアの影響下に育った次世代の研究者たちである。

例えば、パスカル・カザノヴァは、その著書『世界文学空間』（1999）において、

ウォーラーステインの世界システム論を思わせる手つきでブルデューの場の理論を国際的な文学空間へと拡張し、これをもとに世界文学史の見取り図を描くという試みを示している (Casanova 1999=2002)。その極めて壮大な構造は、しかし、基本的な骨格においてみれば、二つの軸の上に組みあげられているといえるだろう。

一方においてカザノヴァは、「文学」を「脱歴史的」で「脱国家的」で「脱政治的」なものとして、すなわち特定の地理的な空間に帰属しない自律的な行為としてイメージさせる国際的な文学空間——「世界文芸共和国」——の存在を指摘する。もちろん、「あらゆる歴史的、政治的関係から解放された」ものとしての「文学」は、局在的な構造的条件を隠蔽したところに語られる「フィクション」である。彼女によれば、その世界文芸共和国は、「フランス語」の獲得した「普遍言語」としての信憑に支えられ、パリを中心として歴史的に構築されたものに他ならない。

16世紀から17世紀にかけて、政治的な統一の実現を背景に、フランスでは世俗言語を標準語として組織化し、これをラテン語に代わる新しい共通言語へと押しあげようとする努力が積み重ねられ、一定の成功をおさめていく。ラテン語との競合関係の中で、フランス語は、その文法や修辞法や「正しい使い方」を確立し、これにもとづく知的営為としての「文学」が創出されていくことになる。この時、フランス語の獲得した威信は、その国内にとどまらず、ヨーロッパの支配階級全体に行きわたるようになる。「フランス語は、政治的威信にみじんもすがることなく、万人の、万人のための、万人に仕える言語として、礼儀作法ならびに洗練された会話の言語として、誰からも受け入れられており、その『権限』は全ヨーロッパに広がっている」(ibid. 訳書：97)。そして、このフランス語の地位の承認とともに、パリは、文学的資源を集中的に蓄積し、国際的な文学空間の中心地——文学の都——としての地位を獲得していく。以降、この街は、「普遍的」で「自律的」な営みとしての文学にモデルを与える役割を負った「世界文芸共和国」の首都として機能するようになる。

しかし、他方においては、この地理的・政治的な限定を超えて広がる広大な文学場に拮抗する形で、それぞれの国家毎に組織され、しばしばそれぞれの「国語」と不可分のものとして表象される「^{ナショナル}国民的」な文学が形成されていく。カザノヴァの表現にしたがえば、「言語は^{アフエール・デク}国事」であり(国語、したがって政治の対象)、同時に文学の『資材』でもあるために、文学資源の集中は必然的に、少なくともその創設の段階では、国の枠組みの中で生み出される。「言語と文学はそれぞれが他方を高尚化することに貢献しつつ、たがいに『政治的理由』の基盤として使用される」

ものであり、したがって、「国民国家の登場と、(『共通語』となる) 俗語の拡大と、またそれと並行してこれらの俗語で書かれる新しい文学の創設とのあいだには、有機的な、あるいは相互依存的な結びつきがある」。「文学資源の蓄積は(……) 必然的に国家の政治史の中に根をおろしている」のである (ibid. 訳書: 56)。

19 世紀に入って続々と組織化されていった「国民国家」は、言語と民衆の結びつきを内在的かつ不可分なものととらえたヘルダーの理論¹¹⁾ を土台として、それぞれの国民の「魂 *âme*」や「精髓 *génie*」を表出する重要な媒体として、「国民文学」を創出させていく。各国の民衆が蓄えてきた個別の伝統を資源として構築される「国民文学」は、それぞれの国民に対等の(文化的) 実存を要求する権利を授ける。そしてそれは、フランスにおいて要求された「普遍的」で「自律的」な知的営為としての「文学」とは原理的に異質なもうひとつの「文学」の定義を提示する。これ以降、「文学」を組織化する二つの原理は、支配と従属の関係をともないながら、局面に応じてたがいに複雑な結びつきを示していく。カザノヴァは、その全体的な見取り図を次のように語っている。

こうして、ヘルダー革命以降、国際的文学空間は、文学資源の量と古さに従って、また同時に、それぞれの国民空間の相対的な自律の(相関的な) 度数に従って、持続的なかたちで構築される。国際的文学空間はしたがってこれ以降ふたつの空間の対立にそって組織される。その両空間のいっぽうは、自律的な極にある、文学資源に最も恵まれた文学空間で、それは形成途上の空間において自律的なポジションを要求するすべての作家たちのモデルともなれば救いともなる空間である(まさにそこにおいてパリは「脱国家化」した普遍的文学首都として成立しているのであり、またそこにおいて、文学の時間の特殊な尺度も制定されたのだった)。もう一方は、[文学資源の] 貧しいあるいは形成途上の文学空間、政治体制に——ほとんどの場合国家体制に——従属している空間である。(訳書: 144-145)

カザノヴァによって提示されたこうした視角は、例えばベルギーとフランスの文学場の関係を検討する際に、これを二項間の閉じた関係(中心と周辺、支配と従属の関係)としてのみとらえるのではなく、より広範な射程をもった文学場の編成の力学の中で検討することを可能にする。すなわち、各国・各地域に生じる場の構造を、二つの異なる原理がそれぞれに個別の歴史的条件の中で生みだす、時に対抗的な、時に共謀的な関係のヴァリエーションの中で、たがいに比較可能なものとして検討していくことができるように思われるのである。実際、のちに見るように、19

世紀末のベルギーにおいても、文学の「普遍的」な「自律性」（つまりは、「文学」の「政治・社会」に対する自律）を語る言説と、それぞれの民族＝人種の「魂」や「精髓」を語る言説とが、固有のバランスにおいて絡み合っているのを見ることができる。その固有の結びつきを生みだしている個別の条件とは何であるのか、ここに「ベルギー文学」研究のひとつの課題を見いだすことができる。

同様の射程をもった研究は、近年、ベルギー、フランス、カナダ、イタリアの研究者たちによる精力的な共同研究・比較研究の展開の中で、少しずつ成果を生みだしているように見える。例えば、カナダ（ケベック）の文学研究者ミッシェル・ビロンは、『モデルニテ・ベルジュ』（1994）において、ブルデューの場の理論とソシオ・クリティークの方法論との総合をはかりながら、ベルギー文学が、その固有の周縁的条件（制度的および社会・政治的な）の下で、いかなる「エクリチュールの戦略」を展開させてきたのかを論じている。その中で、ビロンは「ベルギーのフランス語文学」を、「周縁的なものの中で最もモダンな、モダンなものの中で最も周縁的な」文学と形容している。この定式によって彼が語ろうとしているのは、ベルギーの作家たちが「フランス文学の場」のダイナミズム（その再生産原理、流派やセナークルの交代による不断の革新のサイクル）に対して共時的に同調し、これによって「制度化された」文学としての地位を主張しながら、他方では、「ベルギー文学」のパリに対する周縁性をたえず意識し、かつベルギー国内の社会状況に深くかかわっていくという両義的な性格を保ちつづけてきた、ということにある。ビロンによれば、「ベルギー文学」は、「文学外の拘束から逃れようとする意志をはっきりと表明しながら」、「社会的なるものとの結びつきを原理として守ってこなければならなかった」のである。パリとの（地理的・文化的な）近接性によって、たえず「モデルニテ」の要求にさらされながらも、パリからの遠隔性ゆえに、その要求は「ベルギーの社会的テキスト」によって媒介され、再定式化された形で提示される。個別の状況において作家たちが示す「エクリチュールの選択」は、この「二律背反的な意味請求」に応じて構築されていく「戦略」として読まれなければならない。

ここには、『ワロニー』に対する私たちの読解においても、直接に参照すべき視点を見いだすことができる。まず何よりも重要な点は、ベルギーにおける文学実践を考える場合に、その制度的な「周縁性」や「帰属の二重性」が、それ自体において「矛盾」や「緊張」をはらんだ生産の条件を生みだしているというところにある。ベルギーの作家たちには、フランス文学の場に対する関係の多層性ゆえに、文学の

自律性に対する強いコミットメントと、(ローカルな)社会・政治的な状況との結びつきとが同時に請求されている。したがって、彼らの示す「戦略的な選択」は、構造的に一貫し強く自律した単一の「場」を前提とするところからは十分に読み解けないように思われるのである。しかし、こうした制度的帰属の不確定性があればこそ、場の境界を設定すると同時にその中でのみずからの位置を取得しようとする「企て」が生起するのだといえるだろう。すなわち、文学空間の外部に生じた「社会的緊張」が場の論理に媒介され、文学の言語に翻訳されるというだけにとどまるのではなく、その外在的な状況との関連において、場の制度的な布置そのものが固有の緊張関係をはらみ、これが文学生産を発動させる独自の契機をもたらすのだと考えることができる。文学的企図は、制度的および社会的な二重のコンテクストの中で形成され、相対的に独立したそれぞれの誘発要因に規定されるのである。M. ビロンの議論は、この二重性に対する意識が、とりわけベルギーのような「周辺的」ないし「境界的」な場の研究において有効かつ不可欠であることを示している。

3 文学場の歴史的状況

さて、文学的な実践が、「場」に外在する政治社会的要請と「場」に固有の論理の双方に条件づけられるのだとすれば、私たちはここで、『フロニー』という雑誌の成立した時点での「文学場」の状況について概観しておかねばならないだろう。「文学」というカテゴリーのもとに遂行される言説実践は、直接には、文学場の構造に規定され、これとの対応の中でみずからの取得すべき位置を模索していくのだと考えられるからである。

(1) 「ベルギー文学」¹²⁾：自律化への動き

1880年代。この歴史的な変動の時代は、ベルギーのフランス語文学が、その固有の存在価値を内外に示し始め、相対的にはあれ自律的な文学場を構成していく時代でもあった。

もちろん、それ以前にもベルギーにおける(あるいはベルギー人による)文学作品は数多く書かれ、これを「ベルギー文学」として構築しようとする試みも存在していた。とりわけ、独立国家として国際的な承認が確立していなかった1830年代には、国民の精神的な統一性——のちに「ベルギーの魂 l'âme belge」と呼ばれるもの——を体現し、単一の国家としての正統性を保証する文化的な資源として「国

民文学」の創造が強く求められていた¹³⁾。そして、詩の領域におけるアンドレ・ヴァン・ハッセルト André Van Hasselt (1804-1874) や歴史小説におけるサン＝ジェノワ男爵 le baron de Saint-Genois (1813-1867) など、このイデオロギー的な要請に応えようとする作品も相当数書かれていった。また、1850年代からは、エミール・ルクレルク Emile Leclercq (1827-1907) をはじめとする作家たちが、シャンフルーリやデュランティにならってリアリズム小説を発表していく。しかし、いずれも(ロマン主義からリアリズムへと移行していく)フランス文学の動向を後追いする以上の成果をもたらさず、事後的な視点から見れば、1860年代にいたるまで、ベルギーの文学を固有の存在として主張し、その承認を得るにいたるような作品は産出されなかった。マリアンヌ・ミショーによれば、この時代のベルギー文学は、その実践を支える制度的機構と十二分な市場(読者)の不在を前提として、政治の世界に対する自律性の欠如とフランス文学に対する後進的な従属性によって特徴づけられるのである(Michaux 2001:18)。

ベルギーの文学史の中で、しばしば国民文学の起点に位置づけられるのは、シャルル・ド・コステル Charles De Coster (1827-1879) の『ウーレンシュピーゲルの伝説 La Légende d'Ulenspiegel』(1867)である。ドイツ地方の民話伝承上のキャラクターである「ウーレンシュピーゲル」の冒険譚という形で、スペイン支配に抵抗するフランドルの民衆の姿を描きだした、この叙事的で風刺的な歴史小説は、その物語においても、また擬古表現 archaïsme と新造語 néologisme をふんだんに織り込んだその文体においても、F. ラブレーに通じる祝祭的な活力を備えており、その「文学性」において独自の価値を有するものと評価されている(Klilnkenberg 1973)。

しかし、『ウーレンシュピーゲル』の成功は、文学史の中であってむしろ孤立した一事例であり、しかも、「国民文学の創出者」としての聖別化は、事後的に(1880年代において)なされていった面が強い。したがって、ド・コステルとともに「ベルギー文学」が誕生するという言い方は、いささかのアナクロニズムを含むことになる。

突出した例外的な事例を超えて、ベルギーの作家たちがみずから「固有の文学」を主張し始めるのは、やはり1870年代後半以降のことである。この時代には、フランスの思潮に追随するだけでなく、独自の美的な性格を備えた作品が次々と生み落とされ、これが国際的な(いいかえれば、パリの批評的な審級による)評価を勝ちとることになる。

その一群の作家や詩人たちの先頭には、カミーユ・ルモニエ Camille Lemonnier (1844-1913) の姿を見ることができる。1860年代に、美術批評を出発点として文筆の活動を始めたルモニエは、やがてリアリズムの美学にもとづいて小説の領域へとその世界を広げ、『男 *Un Mâle*』(1881) や『強欲 *Un Happe-chaire*』(1886) などの作品によって成功をおさめる。「ベルギーのゾラ」とも称されるこの作家は、二重の意味で、ベルギー文学の「自律化」を体現する存在であった。まず第一に、彼は「はじめてフランスの批評家の関心を引き」、フランス文学に対する独自性(差異)を承認される作家であったということ。そして第二に、これまたベルギーにおいてははじめて、ルモニエが「文筆で身を立てる」、つまり作家としての収入によって生計をまかなっていく「プロ」の作家であったということ。それゆえに彼は、ローデンバッハが彼に与えた「ベルギー文学の元帥 *maréchal*」という称号が示すように、美学的な立場の違いを超えて、1880年代の若い世代から、ベルギーの「文学」を象徴する存在として、圧倒的な支持を得るにいたる。1883年には、「五年毎の文学賞 *Prix Quinquennal de Littérature*」が、ルモニエに与えられなかったことに抗議して、『若きベルギー』に集う詩人たちが、「名誉回復のための宴 *banquet de réparation*」¹⁴⁾を開く。また、サンボリスムへと接近していくモデルも、『ワロニー』においてくりかえしルモニエを論じ、この作家への賛辞をおしまない。

したがって、ルモニエの登場はもはや孤立した偶発的な出来事ではない。それはベルギー社会の内部に、「文学実践」が展開され構造化される空間——ブルデュエがいう意味での「文学場」——が、量的にも質的にも一定の厚みをもつ形で形成されていく過程を代表している。ルモニエにおいて、あるいはルモニエをめぐる、「ベルギー文学」の輪郭が集合的に形作られていくのである。

その場の構成は、制度的な基盤——特に、テクストの発表と流通を支える媒体——としては、まず何よりも飛躍的に発行の点数を増やした「雑誌」によって担われる。ポール・アロンとピエール＝イヴ・スーシの研究 (Aron et Soucy 1993) によれば、一年間に刊行される文学雑誌の点数は、1830年代から1860年までは5~20点のあいだを、1860年から1880年までは25点前後を推移するのに対し、1880年以降は35~40点へとねあがる¹⁵⁾。もちろん刊行された雑誌の多くは、広範な読者 *public* をもつものではなく、市場での採算を前提としたものでもなかった。経費のほとんどは、寄稿者自身(ないしはその家族)によって負担されていたのであり、その意味では「同人誌」の域をでるものではない。また、個々の寿命

(刊行年数) も決して長いものではなく、創刊と廃刊、離合と集散をくりかえしながら、この数量的な拡大が生じていったのである。しかし、刊行点数の増加は、すでにそれだけで、それを担いうるだけの書き手と一定数の読者の存在、すなわち「文学」の生産と消費を担う「教養階級」の形成を意味している。同時にそれは、「文学」を結節点とした社会関係 sociabilité が生まれ、媒体相互の位置づけを通じて個々の文学主体の立場が可視化され意識化されていくということでもある。

この集合的な動向の中で、とりわけ重要な意味を認められているのが、『若きベルギー *La Jeune Belgique*』(1881-1897) と『近代芸術 *L'Art moderne*』(1881-1914) の刊行であった。

1881年、マックス・ワレル Max Waller (本名モーリス・ワルロモン Maurice Warlomont, 1860-1889) を中心として創刊された『若きベルギー』は、ルーヴァンとブリュッセルの学生たちの雑誌を統合するところに生まれたものであった。当初は限定的な「綱領 programme」をもたず、ベルギーの若い世代の作家たちが、その美学上の相違をこえて結集する場としての性格が強かった。したがってそこには、アルベール・ジロー Albert Giraud (1860-1929) のようなパルナス派の詩人と並んで、カミーユ・ルモニエやジョルジュ・エクハウト Georges Eekhoud (1854-1927) のような自然主義の小説家たち、エミール・ヴェラーレンやモーリス・メーテルリンク、シャルル・ヴァンレルヴェルク、ジョルジュ・ローデンバッハといったサンボリストたちの作品を見ることができる。この雑誌が発した「自分たち自身であれ Soyons nous」という有名な呼びかけが示しているように、『若きベルギー』には「自分たち=ベルギー人」の「文学」を構築しようとする意志が集約されている。制度論的な視点からも、この雑誌は、「ベルギー文学の自律化」を担い、具現化する媒体であったと評価されている¹⁶⁾。しかし、やがて『若きベルギー』は、パルナス派の雑誌として、その性格を純化していくことになる。とりわけ、M. ワレルの死後、A. ジロー、I. ジルキン Iwan Gilkin (1858-1924)、V. ジル Valère Gille (1867-1950) によって雑誌が主導されるようになると、「芸術のための芸術」を前面に主張し、伝統的な形式の遵守とこれを基準とした作品の完成を教義として掲げることになる。こうした流れの中で、ヴェラーレンをはじめとするサンボリストの詩人たちは『若きベルギー』から遠ざかることになる。

他方、『近代芸術』は、弁護士であり、ベルギーの芸術・文化の推進役でもあったエドモン・ピカール Edmond Picard (1836-1924) の手によって、やはり 1881 年に創刊される。「芸術と文学の批評誌」として刊行された『近代芸術』は、美術

批評家オクターヴ・モースや詩人ヴェラーレンらを主要な寄稿者として、「ベルギー文学」のアイデンティティを強く追い求めるとともに、社会生活と芸術との接合を主張し、「社会芸術 art social」あるいは「社会文学 littérature sociale」の実現を要求していく。

P. アロンが『ベルギーの作家と社会主義』（1997）の中で示したように、『若きベルギー』と『近代芸術』は、相互の対立関係の中で、ベルギーの文学場を構造化する基本的な枠組みを形成する。この二つの雑誌は、個々の文学者たちが取得する位置を測定するための座標軸、文学場に用意された「可能性の空間」を設定するための基準点を設定することになる。『ワロニー』をはじめとする後発の媒体は、この二誌との関係の中で、自己の位置づけをはかっていくのである。

とはいえ、既述のように、ここに見いだされるベルギー文学の「自律化」は、とりわけフランス文学との関係においては、きわめて限定的なものであったといわねばならない。ルモニエの聖別化が「パリで評価された」ことに基づいてなされていたように、ベルギー文学の個性は、フランスに対する「差異」の価値づけと、フランスの批評的な審級によるその承認の上に成立する。さまざまな雑誌はベルギーに内在的な批評の機関としての役割を果たし、アカデミーをはじめとするベルギー固有の正統化の審級も確かに存在していた。しかし、これらの制度はいずれも、その批評言語を主にフランスから借用する形でしか機能しなかったし、それ以上に、文学者たちはなおパリでの評価に最も重きをおいて、個々の作品と作家をとらえていた。その意味ではベルギー文学は、フランス（語）文学に強く従属した、下位の場を形成しようとしていたにすぎない。

したがってここで、私たちは、同時代のフランス文学の動向にも目を向けておかねばならない。

（２） フランス文学の場

1880年代。フランス文学の世界は、近代的文学制度の再生産原理である「諸流派の継起関係」を典型的な形で示しながら組織化されている。詩の領域では、ルコント・ド・リールを中心とするパルナス派の象徴資本の独占と、これに対抗するサンボリストたちの台頭によって特徴づけられる。J. デュボアはこの状況を次のように記述している。「1885年ごろには、パルナス派はすでに、詩の場における象徴的権力を掌中におさめている。それは詩的生産を統制し、特定の若き詩人の台頭を促進する力をもつ。しかし、それは同時に広く世俗に受けいれられ、ルーティーン

化し、もはやほとんど集団としての姿をとどめていない。他方で、これと同じ時期に、ポール・ヴェルレーヌがその『呪われた詩人たち』の宣言文とともに、またステファン・マラルメがそのローマ通りの火曜日の会とともに、新たな運動の土台を準備し、支配的な詩的イデオロギーから手を切ろうとしていた。彼らは、また彼らなりに純粹で無私の詩の名のもとに闘いながら、反パルナス派として自己主張していく」(Dubois 1985: 48)。

他方、小説の世界では、エミール・ゾラを首領とする自然主義派の支配が継続している。再びデュボアにしたがえば、「(……) 小説の領域では、自然主義が、20年ほどのあいだ独占的な支配力をふるっていくことになる。実際、自然主義は、はっきりと自覚的に戦闘をしかけ、意図的にさまざまな手段を駆使して、きわめて系統的な形で、みずからの優位を確保することに専心していく。スキャンダルを呼び起こすような小説(『居酒屋』1877)、グループ形成の効果(『メダンの夜会』1880)、教義の宣言(『実験小説論』1880)。こうした一切の手法が、自然主義によって、自己の優位を確かなものとするために使用されていった。そして、自然主義派が多数の信奉者を生みだしていくとすれば、他方ではフロベールとりわけ『感情教育』を引き合いにだしながらも、それは何よりもまずゾラをめぐる展開されるのであり、この世紀の最後の数年にいたって、この『メダンの主』のインスピレーションが枯渇していくと同時に、流派全体が傾いていくのである」。しかし、ゾラの支配もまた絶対的なものではない。「この主の支配に対して、ゴンクール兄弟やアルフォンス・ドーデといった何人かの作家たちが反旗を翻し、より洗練された、あるいはより耽美的な自然主義を生みだそうとする。その一方で、幾人かの若い継承者たちも、『大地』の極端な通俗性に抗して、1887年に宣言を発表し、凝り固まった純粹な自然主義に対して距離をとろうとする」(Dubois 2000: 251)。かくして、自然主義の圧倒的な支配の周辺で、すでにJ. K. ユイスマンスは『さかしま』(1884)を書き、ヴィリエ・ド・リラダンが『未来のイヴ』(1886)を、エドゥアール・デュジャルダンが『月桂樹は折られた』(1887)を完成させる。自然主義的な全体性と構築性にかかわって、神秘性あるいは主観性に彩られた「单身者の小説 romans célibataires」が、プルーストの登場を予告している。

そしてこの時代においてはじめて、ベルギーの作家たちが、フランスの動向を遅れて輸入するのではなく、その運動の最先端と連動する形で文学の前衛へと躍りだしていく(ローデンバッハ、ヴェラーレン、メーテルリンクなど)。しかし、いずれにせよ、モッケルらが乗りだしていこうとしていた文学生産の場は、フランスと

ベルギーとの構造的な二重性，すなわち後者の前者に対する相対的な自律化と従属の共存によって特徴づけられる。若きベルギーの作家たちは，その二側面をともに視野に入れながら，位置の取得のための戦略を組みたてていくことになるのである。

4 多層的な文脈の中の文学的企図

私たちのここでの試みは，これまでに見てきたような歴史的状況を念頭に置きながら，一文学雑誌の成立と展開の過程をあとづけることにある。もちろん，いかなる外在的な状況が，ひとつの文学的企図に対して実質的に有^{レリヴァント}意であるのかは，事前に決定しうるものではなく，そこに産出されたもの（テキスト）との関連の中であらためて確定されていかねばならない。しかし，同時に私たちは，その歴史的な文脈についてまったく予備知識をもたないまま，純粹にテキスト内在的にその歴史的コンテクストを索出することができるわけではない。文学的事実の社会学的な読解は，実質的にテキストとコンテクストとの往復運動の中でしか実現されえない。したがって，歴史的な状況を記述するここまでの作業は，テキストの読解にむけた暫定的な文脈設定という以上の意味をもたない。しかし，ここにはすでに，以下の分析を方向づける基本的な視点が導きだされているはずである。

最も重要な点は，私たちがひとつの文学的企図を複合的で多層的な文脈の中に置いて読んでいかなければならない，というところにある。まず第一に，それは，国民的—地域的同一性の再定義へと向かう政治・社会的変動のプロセスの中に挿入されねばならない。しかし，その言説実践は同時に，それみずからを「自律的」なものとして構築しようとする近代文学の制度的な布置の中にとらわれている。社会的文脈と制度的文脈からの「二律背反的な意味請求」（Biron）に応えつづけること。これが，ベルギーの文学——ひいては『ワロニー』——に顕著な形で課せられたひとつの条件である。

他方，この雑誌が生起した制度的な文脈（ベルギーのフランス語文学の場）は，フランス文学の場に対する従属と自律の二面性に特徴づけられる。ベルギーの作家たちは，常に「パリの文学的審級」を意識しながら，同時に「自分たち」に固有の場の確立をめざす。フランス文学への同一化（追随）と差別化（個性の実現）が，同一の文学実践に同時に要求される。この制度的な「二重帰属」，「準拠枠組みの不確定性」が，ベルギーの文学実践に与えられたもうひとつの構造的条件である。

さらに，こうした多重的な帰属と，その中での「位置の取得」ゲームの背景には，

それぞれの領域と正統性をかけた複数言語のせめぎあいが存在している。フランス語の象徴的支配に対するフラマン語の異議申し立て。その過程の中で浮上してくる「ワロン」同一性という課題。リエージュを拠点として展開されたフランス語文学の雑誌は、この言語をめぐる係争に対して何らかの態度を選択しなければならない。この問題もまた、『ワロニー』の成立と展開を方向づける重要な要因となっていくのである。

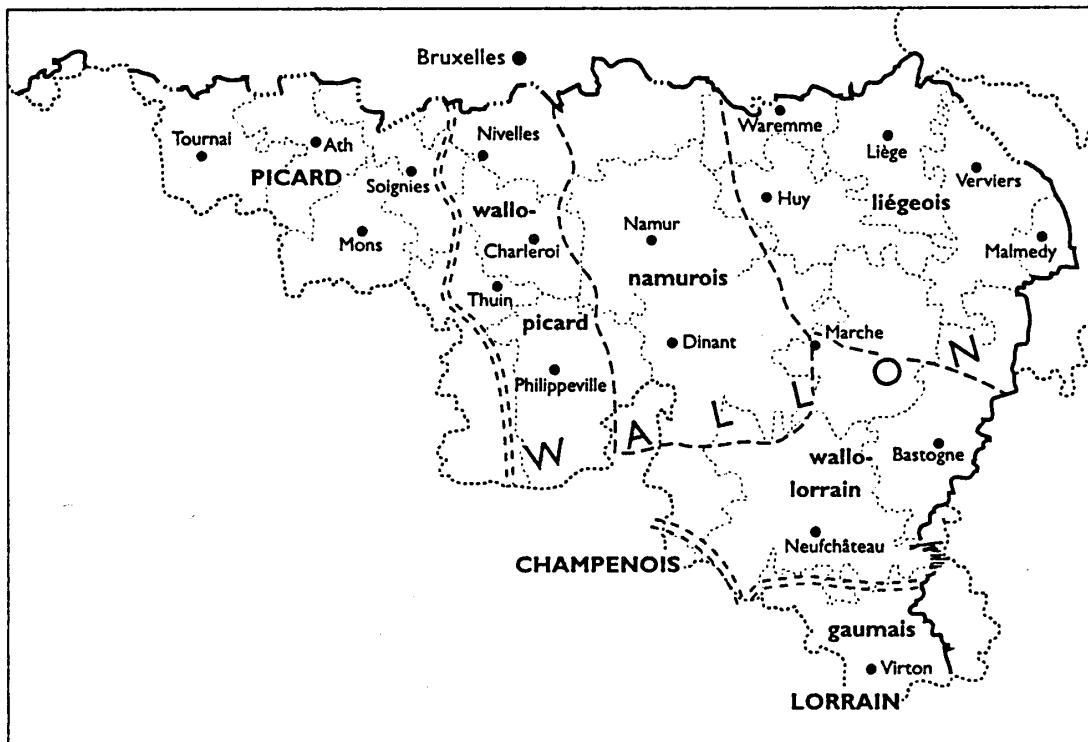
では、こうした多層的な文脈の中で、文学雑誌『ワロニー』はどのような課題を掲げ、何を賭け金として生起してくるのだろうか。次章では、この「雑誌」の「企画」の形成過程を確認していくことにしよう。

注

- 1) 雑誌の寄稿者の一人であったフランシス・ヴィエレ＝グリファン Francis Viélé-Griffin (1863-1937) は、ベルギーフランス語・フランス文学王立アカデミーにおける講演 (1932 年) の中で、次のように振り返る。「この『ワロニー』グループはベルギーにおけるサンボリスムの拠点でした。しかし、パリにおける最良の詩人たちがやがてこれに合流していきます。アルベール・モッケルやピエール・オーリンによって、さらにはアンリ・ド・レニエによって導かれながら、このグループはフランス文学におけるサンボリスムの最も輝かしい拠点のひとつとなるのだということが出来るでしょう」。(Mathews 1947: 92)。
- 2) 「ルネッサンス」は、『若きベルギー』の詩人たちがみずから好んで用いた表現である。「黄金時代」はむしろ事後的に、ベルギーのサンボリストたちが国際的な名声を博した時代を指して用いられることが多い。いずれにしても、この時代を担った主要な媒体が『若きベルギー』と『近代芸術』であることに異論の余地はない。この中で『ワロニー』という雑誌をどう位置づけるのかについては、文学史的な記述の中に多少のばらつきがある。しかし、この雑誌を先行する二誌に対する第三の極とする論述は随所に見ることができる。例えば、Ch. アンジュレは、『ベルギーのフランス語文学』(Ch. ベルグと P. アレン編, 2000 年) において『ワロニー』を次のように位置づけている。「『若きベルギー』と『近代芸術』のあいだで、ついに漁夫の利を占めるものが現われようとしていた。それは、生き生きとした力をあつめることに成功する。リエージュの詩人であり理論家でもあるアルベール・モッケル (1866-1945) によって創設された『ワロニー』(1886-1892) が、詩的生産にかんしては世紀末の先端を行く雑誌となるのである」(Angelet 2000: 61)。
- 3) フランス文学における「地域主義 régionalisme」という用語は、多くの場合に、特定の美学すなわちリアリズム文学に強く結びついており、同時に、「正統王朝派 légitimi-

misme」ないしは「ナショナリズム」といった政治的なイデオロギーと結びつきながら、文化的な正統化の審級の極端な集権化（パリの一極支配）に抵抗する運動という意味あいを帯びている。こうした含意がこの言葉に付随するものとすれば、それは『ワロニー』の文学、とりわけモッケルのそれに対してまったく妥当性をもたない。しかし、アンヌ＝マリー・ティエスにならって、この用語を「限定的な地域に対する準拠が重要な意味をもつ〔文学〕作品」に適用することができるとすれば、『ワロニー』の中には、明らかに「地域主義」的な要素を見いだすことができる。(Thiesse 2002: 508)。

- 4) この問題にかんしては、René Andrianne, *Écrire en Belgique*, 1983, Nathan & Labor. および Hervé Hasquin, *Historiographie et politique en Belgique*, 1996, Institut Jules Destrée. を参照。
- 5) ワロン地方における諸方言。



J. Chaurand (ed.), *Nouvelle histoire de la langue française*, p. 511

- 6) 現在、ベルギーの言語境界線以南の地域を総称する「ワロニー Wallonie」という用語は、19世紀の後半の時点では、まだ「新造語」の域に属していた。文献学者アルベール・アンリによれば、文献に確認される「Wallonie」という言葉の使用は、1388年に孤立した一例としてすでに存在するものの、これは「ガリシア化したフランドル」地方を指すものとして用いられており、今日の用法に直結するものではない。したがって実質的に、「ワロニー」という言葉は、19世紀の半ばに文献学者によって作りだされたものといえる。1844年、フランソワ＝シャルル＝ジョゼフ・グランガナージュ François-Charles-Joseph Grangagnage が『ルヴュー・リエージュ Revue Liège』

において用いたのが、文献上の最初の用例である。これは、多少なりとも明示的に、「若きベルギー統一国家のうちのロマンス語使用地域 la partie romane du jeune État unitaire Belgique」を指すものであった。しかし、この言葉は、文献学者たちのあいだで限定的に用いられたにすぎず、すぐに広く一般に普及したわけではない。むしろ、アルベール・モッケルがその雑誌のタイトルに掲げたことが、言葉を普及させる重要な契機となったのである。また、アンリは、モッケルが『ワロニー』を創刊した1886年が、フランスの考古学者シャルル・ド・リナ Charles de Linas によって、「モザン mosan」という言葉が作りだされた年でもあることに注意をうながしている。それは、「芸術の地理的に限定された個性」に対して関心が高まっていく時代であったことを意味している。(Albert Henry 1990)。

- 7) 「フラマン」「フラマン語」「フランドル」という表記はフランス語の呼称にしたがっている。中立を期すならば「フラムス」「フランデレン語」「フランデレン」と記すべきかもしれない。しかし本稿では、主としてフランス語のテキストにもとづき、フランス語圏、ワロンの側から記述を行う。したがって、特に必要がない場合は「フラマン」「フランドル」と記す。
- 8) デフルートによれば、フランドル地方のフランス語化に抗して、フラマンの伝統文化と言語を保護しようとする運動は、ベルギー独立以前の18世紀末にまで遡ることができるものである (de Vroede 1975: 25)。
- 9) ドゥニーズ・ヴァンダムは、「ワロン運動」の歴史を四つの段階に区分している。第一の段階は、「ワロン語文学リエージュ協会」が設立された19世紀半ばから末まで。この時期には主として、ワロン語方言の文学的遺産を再発見し、これを保護することが目的とされる。第二の段階は、第一回「ワロン会議」開催以降、第二次世界大戦まで。この時期には、政治的なワロン運動が生起し、しだいにワロニーとフランドルとの行政的な分離を推し進める論調が支配的なものとなっていく。第三の段階は、第二次世界大戦から、1960-61年の「大規模ストライキ」を経て、連邦制への制度的な移行が実現されるまでの時期。これは、1940年から45年の戦争時における「対独抵抗運動」の経験をへて、ワロニーのフランス（語）アイデンティティが強化され、共和主義的な政治主張が高まっていく時期でもある。第四の段階は、言語境界線上の街「フーロン」の帰属をめぐる係争が浮上した1983年から現在まで。これは、『ワロン文化宣言 le Manifeste de la culture wallonne』に象徴されるように、ワロンの文化的独自性が再度主張され、要求される時代である。(Van Dam 1998)。
- 10) ジュール・デストレ Jules Destrée (1863-1936) は、弁護士であり、社会主義の立場に立つ政治家であり、同時にワロン運動の最も重要な論客の一人であった。ブリュッセル自由大学を卒業後、シャルルロワを拠点に弁護士としての活動に就いていたデストレは、当初は進歩主義的な自由主義の政治家であり、普通選挙法の実現にむけた行動に

参加していた。しかし、労働運動の高まりとともに社会主義の思想に接近し、ベルギー労働党（POB）選出の最初の国会議員のひとりとなる。

フラマン・ワロン問題とのかかわりにおいても、やはり当初はベルギー国家の統一を支持しつつ、二集団の平等な関係を模索しようとする立場に立っていた。しかし、1890年代からは、フラマン運動の要求に対してワロンの利害を擁護する方向へと力点を移し、その中でベルギーのネーションとしての統一性を虚構として告発し、二つのネーション（あるいは人種 *races*）の異質性と独立性を強調する論を展開するようになる。デストレが、1912年7月の「ワロン民族会議 *Congrès national wallon*」の議事を受けてその翌月に発表した「ワロニーとフランドルの分離にかんする国王への手紙」は、ワロン側からの最初の明示的な「分離」への要求として位置づけられている。

「国王」への呼びかけという形で起草されたこの一文は、まず「ベルギー・ネーション」の統一性の神話を告発するところから始まる。「真実を申し上げさせてください。大いなる、恐るべき真実を。ベルギー人は存在しないのです」（Dupuis&Humblet: 39）。デストレは、ベルギーが「かなり人工的に構成された政治国家」であり、「単一の民族集団ではない」と断定する。ワロニーとフランドルは「地理的」にも、「産業的」にも、「気質的」にも、「宗教的」にも対照的な性格を備えており、何よりも民族的共同性の基盤となる「言語」において決定的な差異をとまなっている、からである。ベルギー人の人口の4割はフランス語しか話さず、また別の4割はフラマン語しか話さない。ベルギー人とは、二つの異なる言語集団の構成体でしかない。つまり「ベルギーには、ワロン人とフラマン人がいるのであって、ベルギー人は存在しない」（*ibid.*: 41）のである。したがってまた、エドモン・ピカールが主張するような「ベルギーの魂 *l'âme belge*」は「薄ぼんやりとした幻想」にすぎない。「ベルギーの魂は存在しません。フラマンとワロンの融合は望ましいことではありません。そしてもしそれを望んだとしても、やはりそれは不可能なのだといわねばならないでしょう」（*ibid.*: 42）。

この民族的な二元性を確認した上で、デストレは、二つの民族 *peuples* が、他方の利益のために侵害されることなく共存することが、この国家が生き延びる道であると主張する。こうした観点から、デストレは、フラマンによるこれまでの権利請求を正当なものと認め、みずからもその主張の実現に尽力して来たのだと告げる。しかし、今日、フランドルからの要求は、その数の上での優位に立脚して、しだいにワロンの権利を侵害しつつある。フラマンは、自分たちこそがベルギーの栄えある歴史の担い手、芸術の担い手であることを主張し、ワロンの歴史を奪いとりつつある。フラマンは、国中で二言語使用の要求によって、公的職務の領域からワロンを排除しようとしている。フラマンは、その政治的主張の過激化によって、社会生活の安全を脅かそうとしている。そして、二民族の対立は、国民の意思を反映した政治的決定をますます困難なものにしている。こうした一連のワロンの見方を代弁した上で、デストレは、これ以上の民族的な対

立は国家の安全を揺るがしかねないという認識を示す。そして、この危機的な事態に対してとりうる最善の手段は、ワロニーとフランドルとの「行政的な分離」でしかありえない、と主張するのである。「ベルギーが自立的で自由な、まさのその相互の自立性ゆえにたがいに認め合う二つの民族 *peuples* の連合体となれば、それは、その半分が他の半分によって抑圧されていると感じているベルギーよりもはるかに堅固な国家となるのではないのでしょうか」。「団結が力を生みます。(……) しかし、いつわりの、押しつけられた、乱暴な数の拘束力にもとづいた団結、公式の宣言に示されるだけで、市民の心の中に存在しない団結は、決して自由に同意された団結、忠実な衷心からの合意とはいえないものでありましょう。さてしかし、そのような団結は現行の憲法の下で確立されるものでありましょうか。そこに一切の問題があります」(ibid.: 55)。共存のための分離。デストレがここに示した論法は、20 世紀のベルギーの歴史を方向づけるものになっていく。

- 11) ヨハン・ゴットフリート・ヘルダー Johann Gottfried Herder (1744-1803) は、『言語起源論』(1770)において、ジュースミルヒによって代表される言語神授説と、コンディヤックやルソーによって示された言語の動物的起源説を同時に批判しながら、言語の起源を人間に固有のものとしての「理性」あるいはその「意識性」に求める。ヘルダーが「意識性」と呼ぶ「自覚的反省作用を伴った人間理性」は「動物における本能に相当するところの人間的本能であって、人間が人間である限り生得的に具わっている人間固有の自然的本性である」(『言語起源論』解説: 236)。言語とは、その人間理性を成立させる唯一必須の条件であり、その理性がもたらした必然的な産物である。「理性は、その存在の最初の瞬間から言語を創造し、言語と同時的に存在せざるをえない」(同: 237)。「人間は、彼に生まれつき具わっている意識性の状態におかれて、この意識性を初めて独力で働かせたとき、言語を発明したのである」。「従って言語の発明は、人間にとっては彼が人間であるのと同じ位自然なことである」(『言語起源論』訳書: 37)。このように、人間の理性、あるいは精神性と言語の働きとを根源的に不可分なものとするところに、ヘルダーの思想の基本がある。

その上で、ヘルダーは、言語の歴史哲学とでもいうべき思考を展開させる。彼は人類の、したがってまた言語の「単一起源」説を支持しながらも、人類がその発展につれて単一の群れを維持することができず、地球上に分散し、それぞれの「風土」に適応していく中で、父から子へ、父祖からその子孫へと、部族の言語が伝承され、それぞれに独自の発展をとげることになると考える。つまり人類は、一組の男女から発しながらも、民族として広がり、祖父たちの豊富な経験を受け継ぎながら、それぞれの新しい土地に適応し、「やがては独自の生活様式・思考様式・言語をそなえた土着民となる」(同: 160-161) のである。ここにはヘルダーの、「民族の固有性」、その「歴史的な独自性」にかんする考え方を見ることができる。一方においてヘルダーは、それぞれの民族の歩みを

「発展」としてとらえながらも、その固有の歴史の中にあるそれぞれの民族は相互に優劣をつけたい固有の価値をもつのだと主張する。例えば、エジプトにはエジプトの、フェニキアにはフェニキアの文明があり、その文化的属性をその歴史的文脈から切り離して評価することに意味はない。「エジプト固有の徳をその国土、時代、人間精神の少年時代から切り離して、別の時代の物差しで測ろうとするのはばかげたことである」（『人間性形成のための歴史哲学異説』訳書：88）。「人間の本性は、哲学者の定義するような、絶対で独自で不変な幸福をいれる器ではな」く、「それは、きわめて多様な状態や必要に応じ、さまざまな圧迫を受けながら、きわめて多様な形を取る柔らかな粘土のようなものである。幸福のイメージそのものが、状態や風土とともに変わる（……）。結局はだから、比較するということがすべて疑わしいのだ」（同：105）。

このような、それぞれの文化を歴史的に相対化し、そしてその精神の核心に言語を位置づけるような民族観において、ヘルダーは、フランス啓蒙主義が前提とした普遍的な人間本性の理論の対極に立つことになる。文学にかんしても、規範化された唯一の言語の押しつけを批判し、「言語の純化はその豊かさを奪う」というハーマンの立場に賛同を示す。また実際に、ドイツの民衆の伝承や詩を集め、のちのグリムらの民話蒐集の伝統の先駆けともなる。彼の歴史哲学・言語哲学は、古典主義の「開明」期を理想化するヴォルテール流の哲学に対抗して、それぞれの時代、それぞれの国民の価値の平等を主張する立場の基礎を築く。P. カザノヴァによれば、「ヘルダーは、フランスの覇権にたいする、ドイツだけに有効な、新しい異議申し立てのやり方を提唱するにとどまるのではなく、政治的に支配されている領土すべてに、おのれの従属状態と戦うための独自の解決法をあみだすことを可能にする理論的母型を用いる。彼は、国民と言語のあいだの必然的な結びつきを作り出すことによって、いまだ政治的にも文化的にも認知されていない民族すべてに、平等な（文学的、政治的）実存を要求する権利を与える」のである（Casanova 1999 訳書：106）。

- 12) 「ベルギーの文学」という表記を、本稿では、当面の記述の対象に即して、ベルギー国内およびベルギー人によるフランス語文学に限定して用いる。もちろん、同時代においても、ベルギーのフラマン語（オランダ語）文学は存在しており、この表記が一面的であることはいうまでもない。
- 13) 1830年に独立を宣言したベルギーではあったが、1839年にいたるまで、その国際的な地位は最終的に安定しなかった。そうした不確定な状況の中で、ネーションの存在を凝縮的に表現する媒体として「文学」を要請する主張が存在した。独立のための闘争は存在したものの、大きな苦しみもなくあっけなく建国へとたどり着いてしまったベルギー。それ以前に単一の政治的統一体として存在したことのない、新たな枠組みとしてのベルギー。そこには、ナショナルな感情の基盤となる共同の歴史的な経験（集合的記憶）が欠落している（あるいはむしろ、共通の記憶を「構築」するための条件が十分には与

えられていない、というべきだろうか)。その中で、「ベルギーの魂の存在を例証し、人々に示すこと、歴史をつなぎとめること」を「役割」として「国民文学」の創設が期待されたのである。「ナショナルという言葉にふさわしいものとなるために、文学は「ネーションに固有の精髓 *génie* を保有するような性格」をもたなければならない」（「ベルギーの魂 *l'âme belge*」という用語そのものは、19世紀末に E. ピカールが提起したものであるが、実質的にはそこに示された問題がすでに30年代に主題化されていた）。いうまでもなく、この主張は、新生国家ベルギーの支配階級（ブルジョアジー）のイデオロギーに他ならなかった。（Klinkenberg 1980）。

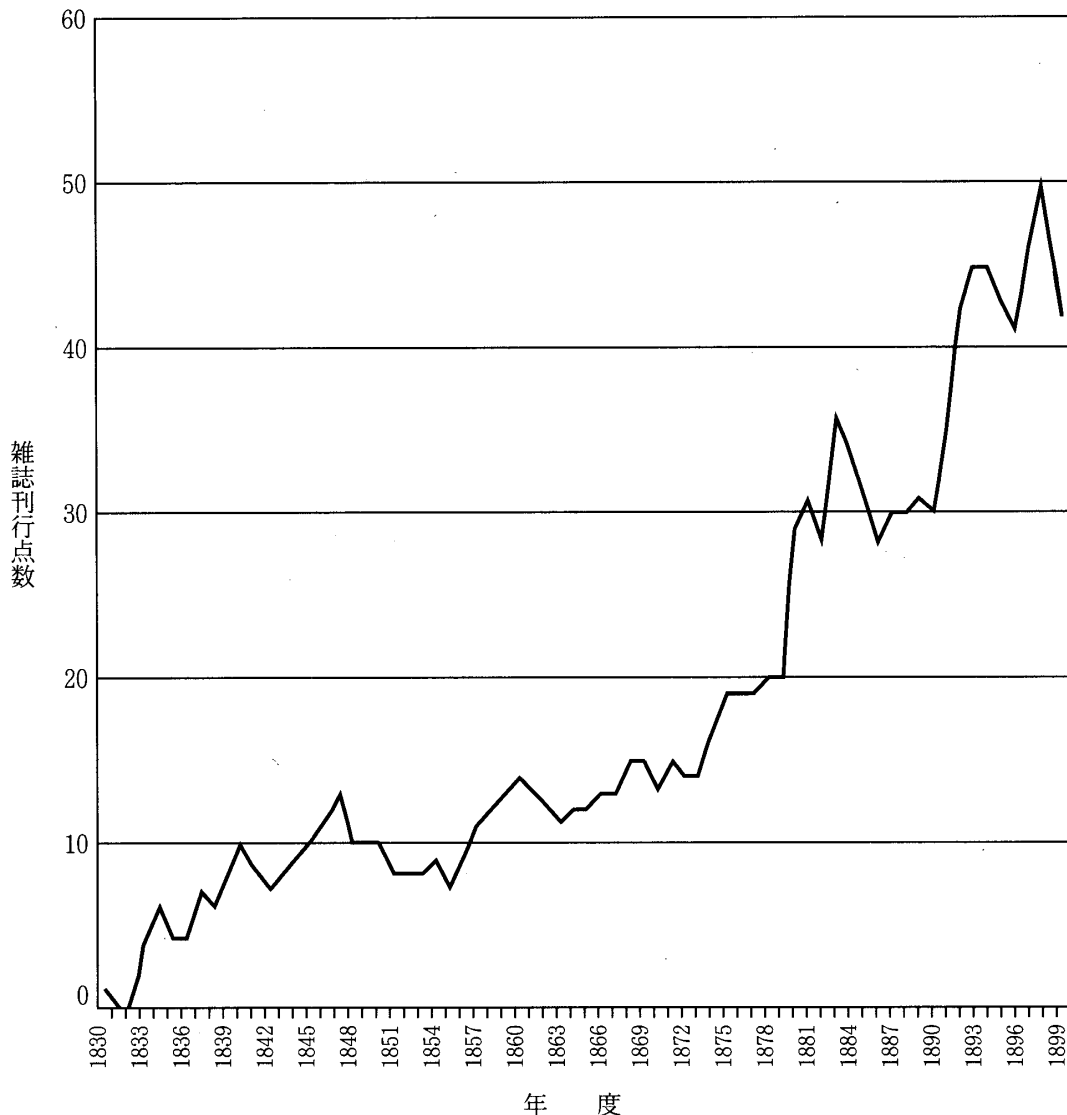
- 14) 「1883年5月27日、『若きベルギー』誌はブリュッセルにおいて、200人以上の人間（作家、画家、音楽家、弁護士、編集者、新聞記者、学生、代議士など）を集め、『抗議のための厳かな宴』を開く。これは五年毎の文学賞（当時のベルギーにおいては唯一重要な賞であった）の審査委員会が過半数の賛同を得られなかったことを理由に1883年のコンクールを受賞者をださないと決定したことに對して、憤懣の意を公に示すためのものであった」（Biron 2003: 139）。この宴はしかし、実質的にカミーユ・ルモニエの名前に結びついており、この作家への承認が与えられなかったことへの抗議という性格をもっていた。ルモニエは「新しい世代の作家たちの目には、理想の受賞者と同時に一種の指導者を体現していたのである」（ibid.: 139）。G. ローデンバッハがルモニエを「ベルギー文学の元帥」と名づけたのも、この席上でのことであった。

ただし、M. ビロンによれば、この「宴」は、単に文学賞の審査委員会に抗議して一作家の名誉を守ろうとする集まりであるばかりでなく、ベルギーの作家たちがみずからの領域の——公的な権力に対する——自律性を主張する意思表示の場として機能していた。そうした性格は、この席で『若きベルギー』によって起草された「宣言文」にはっきりと示されている。その要点は以下の5点に要約される。①ベルギーにおいては長年にわたって公的権力と報道機関の文学への無関心がつづいてきた。②今回のカミーユ・ルモニエへの授賞の拒否も、このような怒りの覚醒を呼び覚まさなければ、そうした無関心を示すひとつのエピソードに終わってしまったことだろう。③政府によって指名される、文学者ではない人物からなる第二審査会は不要である。歴代受賞者の凡庸さがそれを物語っている。④これに対する解決策は、芸術と権力との分離を明らかにすることしかありえない。⑤文学的価値を判断することのできる唯一のグループは「文学者・芸術家」たちをおいて他にない（Biron 1998: 143）。このように、『若きベルギー』は、文学的審級を政治的な権力から切り離し、文学者の手に掌握することを主張する。フランスの文学がみずからの自律性を「市場」の論理に對立するものとして提示する（これによって、文化的正統性を大衆的なものから峻別する）傾向にあったのに対し、ベルギーでは、十分な規模をもった文学的財の市場が形成されていなかったため、「文学」の固有性は「政治的な権力」に抗するものとして提示される。「宴」は、半ば公の集いと

して、公的な制度に対抗するもうひとつの制度構築という意味をもっていたのである。

- 15) Paul Aron & Pierre-Yves Soucy, *Les Revues littéraires belges de langue française de 1830 à nos jours*, 1993 参照。

雑誌の刊行数の増加 1830-1899



Aron & Soucy, (1993 : 209)

- 16) J.-M. クリンケンベルグと B. ドゥニは、リエージュ大学における講義向けテキスト (*Histoire de la littérature francophone de Belgique*) において、次のように論じる。「実際のところ、『若きベルギー』は相対的に自律的なベルギー文学の存在を明確化することを可能にする。そこには、フランスの文学的創造への一貫した関心が存在するとしても、ベルギーの作家たちに対する最初の批評的言説の誕生を見ることができる。それは『若きベルギー』の作家たち (……) を、ひとつの伝統の中に組み入れようという意図をともなうものであった」(p. 33)。「ベルギー文学の制度化を『若きベルギー』に遡ることができるだろう。この雑誌は、メーテルリンク、ヴェラーレン、ヴァンレルベル

ク、ローデンバッハといったベルギーのフランス語文学の古典的存在に表現の場を与え、認知され、承認されることを可能にする。この雑誌は、サンボリスト世代の成功を準備する。より直接的な制度的次元では、『ベルギーフランス語・フランス文学王立アカデミー』（1920年創設）の最初のメンバーの核を輩出し、これによってベルギーの文学史にかんする最初の学説を誕生させる（それがおよそ1970年代まで有効なものにとどまるのだ！）。ベルギー文学の最初の一貫した歴史は、この運動に近いところにいた人物フランシス・ノーテ（1854-1896）の手になるものである」（Klinkenberg & Denis 2002: 34）。

〈参考文献〉

- Andrianne, René 1983 *Écrire en Belgique, Essai sur les conditions d'écriture en Belgique francophone*, Nathan (Paris) et Labor (Bruxelles).
- Angelet, Christian 2000 «Vers la reconnaissance internationale» dans Berg, Christian & Halen, Pierre *Littératures belges de langue française, Histoire & perspectives (1830-2000)*, Le Cri, (Bruxelles).
- Aron, Paul 1997 *Les Écrivains belges et le socialisme (1880-1913)*, Éditions Labor (Bruxelles).
- Aron, Paul et Pierre-Yves Soucy 1993 *Les Revues littéraires belges de langue française de 1830 à nos jours*, Labor (Bruxelles).
- Beaufays, Jean 1988 «Petite histoire d'un jeune État binational», dans Martinello, Marco & Marc Swyngedouw (ed.) *Où va la Belgique? Les soubresauts d'une petite démocratie européenne*, L'Harmattan (Paris).
- Berg, Christian & Halen, Pierre 2000 *Littératures belges de langue française, Histoire & perspectives (1830-2000)*, Le Cri, (Bruxelles).
- Bertrand Jean-Pierre, Biron Michel, Denis Benoît, Grutman Rainier (éds.) 2003 *Histoire de la littérature belge, 1830-2000*, Fayard (Paris).
- Biron, Michel 1994 *La Modernité belge, littérature et société*, Éditions Labor (Bruxelles), P. U de Montréal (Montréal).
- 1998 «Littérature et banquet», dans *Textyle*, No. 15, Le Cri (Bruxelles).
- 2003 «Un banquet de réparation est organisé en l'honneur de Camille Lemonnier», dans Bertrand, Biron, Denis, Grutman (éds.) *Histoire de la littérature belge, 1830-2000*, Fayard (Paris).
- Blancart-Cassou, Jacqueline et als. 1995 *La Littérature belge de langue française*, Éditions l'Harmattan (Paris).
- Blampain, Daniel et als. (eds.) 1997 *Le Français en Belgique*, Duculot (Louvain-

- la-neuve).
- Bosmant, Jules 1978 «Le réalisme et le naturalisme», dans Lejeune et Stiennon (éds.) *La Wallonie, Le pays et les hommes*, La Renaissance du livre.
- Bourdieu, Pierre 1971 «Le Marché des bien symboliques», *L'Année sociologique*, 22.
- 1985 «Existe-t-il une littérature belge. Limite d'un champ et frontières politiques», *Étude de lettres*, vol. III, pp.3-6.
- 1992 *Les Règles de l'art, Genèse et structure du champ littéraire*, Éditions du Seuil (Paris) (石井洋二郎訳『芸術の規則 I・II』, 藤原書店, 1995-96年).
- Burniaux, Robert et Frickx, Robert 1973 *La Littérature belge d'expression française*, PUF (Paris).
- Casanova, Pascale 1999 *La République mondiale des lettres*, Seuil (Paris). (岩切正一郎訳, 『世界文学空間 文学資本と文学革命』, 藤原書店, 2002年).
- Charlier, Joséphine 1985 *Albert Mockel, sa vie, son oeuvre* (mémoire de licence en philologie romane, Université de Liège, Faculté de Philosophie et de Lettres).
- Chaurand, Jacques 1999 *Nouvelle histoire de la langue française*, Seuil (Paris).
- Demoulin, Bruno & Kupper, Jean-Louis 2002 *Histoire de la principauté de Liège*, Privat (Toulouse).
- Deprez, Kas and Vos, Louis (eds.) 1998 *Nationalism in Belgium, shifting identities, 1780-1995*. MacMillan Press (London).
- De Vroede, M., 1975 *Le Mouvement flamand en Belgique*, Kultuurraad voor Vlaanderen en Instituut voor Voorlichting.
- Dubois, Jacques 1985 *L'Institution de la littérature*, Éditions Labor (Bruxelles).
- 2000 *Les Romanciers du réel, De Balzac à Simenon*, Seuil (Paris). (鈴木智之訳, 『現実を語る小説家たち バルザックからシムノンまで』, 法政大学出版局, 近刊予定).
- Dumont, Georges-Henri 1991 *La Belgique*, «Que sais-je?», PUF (Paris).
- Dupuis, Patrick & Humblet, Jean-Emile 1998 *Un siècle de mouvement wallon 1890-1997*, Quorum (Gerpennes).
- Frickx, Robert et Klinkenberg, Jean-Marie 1980 *Littérature française de Belgique*, Nathan (Paris), 《Langue et Language 6》.
- Gauvin, Lise et Klinkenberg, Jean-Marie (éds.) 1991 *Écrivain cherche lecteur, l'écrivain francophone et ses publics*, Éditions Creaphis (Paris).
- Hanse, Joseph 1978 «Le romantisme dans les provinces wallonnes», dans Lejeune

- et Stiennon (éds.) *La Wallonie, Le pays et les hommes*, La Renaissance du livre.
- 1978 «Du romantisme au naturalisme et au symbolisme», dans Lejeune et Stiennon (éds.) *La Wallonie, Le pays et les hommes*, La Renaissance du livre.
- 1992 *Naissance d'une littérature*, Labor (Bruxelles).
- Hayt, Franz & Galloy, Denise 1993 *La Belgique, des tribus gauloises à l'État fédéral*, De Boeck (Bruxelles).
- Hasquin, Herve 1996 *Historiographie et politique en Belgique*, Éditions de l'Université de Bruxelles (Bruxelles) et Institut Jules Destrée (Charleroi).
- Henry, Albert 1990 *Histoire des mots wallon et wallonie*, Institut Jules Destrée (Mont-sur-Marchienne).
- Herder, Johann Gottfried 1770 *Abhandlung über den Ursprung der Sprache*, (大阪大学ドイツ近代文学研究会訳, 『言語起源論』, 法政大学出版局, 1972年).
- 1774 *Auch eine Philosophie der Geschichte zur Bildung der Menschheit*, (登張正実・小栗浩訳, 「人間性形成のための歴史哲学異説」, 『世界の名著7 ヘルダー, ゲーテ』, 中央公論社, 1975年).
- 岩本和子 1997 「『フロニー』誌にみるベルギー象徴派のコスモポリタニズムと地域主義」, 『国際文化学研究』第8号, 神戸大学国際文化学部.
- Klinkenberg, Jean-Marie 1973 *Style et archaïsme dans la Légende d'Ulenspiegel de Charles De Coster*. Palais des Académies (Bruxelles).
- 1980 «Idéologie de la 'littérature nationale' (1830-1839)», *Studia Belgica*, (Francfort).
- 1981 «La production littéraire en Belgique francophone : esquisse d'une sociologie historique», dans *Littérature*, No 44, 1981 Décembre, Larousse (Paris).
- Klinkenberg, Jean-Marie & Denis, Benoît 2002 *Histoire de la littérature francophone de Belgique* (notes et documents pour le cours de *Littérature française moderne. Partim : Hors de France*), Université de Liège.
- Lejeune, Rita et Stiennon, Jacques 1978 *La Wallonie, Le pays et les hommes*, Le Renaissance du livre.
- Luc, Anne-Françoise 1990 *Le Naturalisme belge*, Éditions Labor (Bruxelles).
- Macherey, Pierre 1966 *Pour une théorie de la production littéraire*, Maspero (Paris).
- Mabille, Xavier 2000 *Histoire politique de la Belgique, Facteurs et acteurs de*

- changement* (4^e édition), CRISP (Bruxelles).
- Mahim, Lucien 1999 *Qué walon po dmwin? Éradication et renaissance de la langue wallonne*, Quorum (Gerpennes).
- Maquet, Albert 1978 «La chanson et la poésie wallonnes au XIX^e siècle», dans Lejeune et Stiennon (éds.) *La Wallonie, Le pays et les hommes*, La Renaissance du livre.
- 1978 «Henri Simon», dans Lejeune et Stiennon (éds.) *La Wallonie, Le pays et les hommes*, La Renaissance du livre.
- Marchal, André 1978 «Le paysage en Wallonie au XIX^e siècle», dans Lejeune et Stiennon (éds.) *La Wallonie, Le pays et les hommes*, La Renaissance du livre.
- Martinello, Marco & Marc Swyngedouw (éds.) 1998 *Où va la Belgique? Les soubresauts d'une petite démocratie européenne*, L'Harmattan (Paris).
- Mathews, Andrew Jackson 1947 *La Wallonie, 1886-1892, The Symbolist Movement in Belgium*, King's Crown Press (New York).
- McRae, Kenneth D. 1986 *Conflict and Compromise in Multilingual Societies, Belgium*, Wilfrid Laurier University Press (Waterloo, Ontario).
- Michaud, Marianne 2000 «La difficile conquête de l'autonomie», dans Berg, Christian & Halen, Pierre *Littératures belges de langue française, Histoire & perspectives (1830-2000)*, Le Cri, (Bruxelles).
- Paque, Jeannine 1989 *Le Symbolisme belge*, Éditions Labor (Bruxelles).
- 2003 «Albert Mockel fonde *La Wallonie*, entre Liège et Paris» dans Bertrand, Biron, Denis, Grutman (éds.) *Histoire de la littérature belge, 1830-2000*, Fayard (Paris).
- Piron, Maurice 1968 *Le problème des littératures françaises marginales*, Palais des Académies (Bruxelles).
- Quaghebeur, Marc 1980 «Littérature et fonctionnement idéologique en Belgique francophone», dans Jacques Sojcher, *La Belgique malgré tout*. Éditions de l'Université de Bruxelles (Bruxelles).
- 1982 «Balise pour l'histoire de nos lettres», dans *Alphabet des lettres belges de langue française*. Association pour une promotion des lettres belges de langue française, (Bruxelles).
- 1998 *Balise pour l'histoire des lettres belges*, Éditions Labor, (Bruxelles).
- Quaghebeur, Marc et Savy, Nicole (éds.) 1997 *France-Belgique (1848-1914), affinités-ambiguïtés*, Éditions Labor (Bruxelles).
- 鈴木智之 1996 「作品の科学はいかにして可能となるか— P. ブルデューにおける『文学

- 生産の場』の理論をめぐって一」,『社会学評論』,第47巻,日本社会学会.
- Thiesse, Anne-Marie 1991 *Écrire la France, le mouvement littéraire régionaliste de la langue française entre la Belle Époque et la Libération*, PUF (Paris).
- 2001 *La Création des identités nationales, Europe XVIIIe-XXe siècle*, Seuil (Paris).
- 2002 «régionalisme», dans *Le Dictionnaire du Littéraire*, PUF (Paris).
- Thiry, Marcel 1978 «La découverte triomphante du symbolisme, *La Wallonie* d'Albert Mockel», dans Lejeune et Stiennon (éds.) *La Wallonie, Le pays et les hommes*, Le Renaissance du livre.
- 1978 «Le chemin du régionalisme», dans Lejeune et Stiennon (éds.) *La Wallonie, Le pays et les hommes*, Le Renaissance du livre.
- 1978 «Du symbolisme à 1914», dans Lejeune et Stiennon (éds.) *La Wallonie, Le pays et les hommes*, Le Renaissance du livre.
- Thumerel, Fabrice 2002 *Le Champ littéraire français au XXe siècle, Éléments pour une sociologie de la littérature*, Armand Colin (Paris).
- Van Dame, Denise 1998 «Histoire du mouvement wallon», dans Martinello, Marco & Marc Swyngedouw (éds.) *Où va la Belgique? Les soubresauts d'une petite démocratie européenne*, L'Harmattan (Paris).
- Vanelderren, Francis et Comhaire, Georges 1978 «Les artistes symbolistes en Wallonie», dans Lejeune et Stiennon (éds.) *La Wallonie, Le pays et les hommes*, Le Renaissance du livre.
- Von Busekist 1998 *La Belgique, politique des langues et construction de l'État*, Duculot (Paris, Bruxelles).
- Wils, Lode 1992=1996 (trad. par Chantal Kesteloot) *Histoire des nations belges*, Quorum, (Ottignies).